

---

# キス・ミー・ベイビー

sadtoshit

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キス・ミー・ベイベィ

### 【Nコード】

N4668M

### 【作者名】

sadtoshit

### 【あらすじ】

邑背里美は西部橙高校一年生。過去の失恋経験から男性を嫌悪の対象にしてしまう単純な彼女が、幼馴染のアニー、三年生の鎌田、学食のパート婦、円代達と繰り広げるアオハル・オプ・スクールデイズ！

## ブローグ・アフタースクール

里美は校門をくぐる度、復讐の念を常に抱いていた。

…といっても、入学式から早二週間でいきなり机の上に花びんを置かれたり、ロッカーにスズメの死体を入れられたり、体育倉庫でリンチされたりといった、金曜夜十時からの野島伸司ドラマみたいな事をリアルにされていた訳では無い。

里美は中学在学時に交際していた違うクラスの男子、勇太と漫画に毛が生えた程度のベタベタな失恋を通り越して以来、男が嫌いになっっていた。

この春に入学した西部橙高校で、里美は失恋の恨み、いわゆるラグ・コンプレックス・バーニングを晴らすべく、この学び舎に存在している雄というオス皆全て…エロをでかい声で叫ぶ事しか才能が無い男子生徒、モンスターペアレントの対応に追われる男性教員、ホウキをもつて校内をウロウロしている用務員のオッサン、購買の店番をしている人畜無害なジジーにまで、極めて理不尽な想いをキープオンしていた。

「里美い、やっぱうまい事いかないものね！もつと高校ってオトナっぱい空気予想してた！あんま中学と変わんねーでやんの。」

「私もアンタみたいに輝かしいニュースクールライフに期待してたわよ。三月まではね。」

「はいはい、また出ました勇太病！オトコに全てを傾けてる青春ってチョー馬鹿っぱーい！角川文庫みたいな現実をこの高校には期

待しない事ね！さとみちゅわぁーん！」

「アニー…、今のあたしならアンタとの幼馴染の縁だって躊躇無く切れそうだよ。爪を切る様な感覚でね！でも爪と一緒に元通りになるのも早いのよね。残念だったらありゃしない。」

「そのまま男にウジウジしっぱなしの放課後って、一緒に居る私までカビ生えてきそうだよ。ただでさえ生理で腹重いんだから勘弁してよ！」

里美の幼馴染、アニーこと奈菜は顔に少しそばかすがあるという事だけで幼少の時から里美にそう呼ばれてきた。

物事を直感で捉えるアニーと、穿った観点を冗談でよく誤魔化す里美は、本人達も気付かない友情が絶妙なバランスで成り立っていた。高校でのクラスは違ったが、里美とアニーは思春期をカヌー感覚で上り下りしていた。

「んじゃまた明日ね！昨日みたいに眠れないからって深夜にメルしてくんなよ？！今度はシカトぶっこくから！女々しい夜の二つや二つあった方がコクのある女になれんじゃねー？はははははは！」

アニーとの別れ際、後半の言葉は東武野田線の騒音に埋もれてしまっていた。

「要するに、しゃきつとしろよって事だな。」

深呼吸をしながら里美はヘッドホンに耳をあて、進学祝いにもらったMDウオークマンを再生もせず楽器に見立て、マラカスの様にリズムを刻み、縁石に飛び乗りバランスを保ったまま、鼻歌を歌い

続けた。

ヘッドホンから流れる音楽は、里美が自ら歌った鼻歌のエコー。まるでライブハウスの様な身体音響施設に里美は心を預けていた。

重いカバンを振り回す。

スカートに波を作る。

履き慣れない真新しい靴でふと踏んでいたステップは、終わりが必ず来てしまう放課後への序章であった。

## テイスト・オブ・コロツケ

里美は部活動に入る気なんか最初から無かったので、教室を出てから勧誘を撒くのに毎日一苦労していた。

部活動という集落は里美にとって全部合コンの類にしか思えず、例え文科系でも全てチャライイメージ、いわゆる偏見が付いて回っていた。

男も嫌いなら、その嫌いな男に媚を売る女、すなわちビッチももちろん併せて嫌いだった。

里美は基本的に自分の幸せには盲目で、人の不幸に躍起を示すという曲がった心を常に持っている、

「何処にでもいる面倒臭い不幸女」という恵比寿で飲んだ暮れているOLみたいな女性像を高校生ながら地で行っていたのである。

しかし里美は、

「これじゃまるで『りぼん』に出てくる悲劇のヒロインじゃねえか。ダサ。」

アニーに突っ込まれる前に自分で気付く辺りはさすがに十六才のクソガキ、といったところであろうか。

そんな事を思いながら校門を過ぎようとした所、ポンと優しく誰かに肩を叩かれた。

「また部活の勧誘かよ……」

そう思いつつも反射的に振り向いてしまった瞬間、里美はうかつにもドキッとしてしまった。

「よお。卒業式ぶりじゃん。」

二ヶ月ぶりに見た勇太の顔は、違う制服を着ていた姿を初めて見た為か、少し垢抜けた印象だった。

里美は数秒のタイムラグに襲われたが、動揺をあえて隠さず、その勢いに任せて叫びたてた。

「はア?! アンタココで何してんの? 新しい彼女でも出来たの?」

「その…まさかだったりして! なーんて。冗談だよ冗談。」

「どうでもいいわ。ノコノコ声掛けれる神経もギネス級にラフね。余りにもつままない冗談言いにわざわざ此処まで来たの?」

「ちげーよ。このチャリで通り掛かったただけだって。帰り道なんだ。また会っても今度は声掛けねーから。ごめん。んじゃ。」

思った以上に冷たく当たられた勇太は予想してたとは言え、凹んだ気分で自転車を漕ぎ出した。

その背中を見ながら里美は

「バーカ! 負けを認めに来るくらいだったら幸せ自慢撒き散らせつつーの!」

泪目になりながら独り言を呟いた横で、

「まるで『りぼん』みたいね。ダサ。」

とアニーがコロッケを頬張りながら呟き返した。

「『りぼん』のサブヒロインがコロッケ頬張るなよ。ダサ。」

「まあ、食いなよ。はい。」

アニーがカバンからコロッケを差し出した。

里美は絶対に今夜、眠れないメールをアニーに送りまくってやる  
うと心に誓い、コロッケを泣きながら頬張った。

季節は高校入学後、初の梅雨を迎えようとしていた。



## 学食・マイ・ブルー・ヘブン

下校時のバスが来るまでの時間、里美とアニーは今日も学食でダベっていた。

お互いのクラスにいる変な奴、親への愚痴、未知の将来。十六才という職業は正に謳歌する事が生業なのだ、という事に気付く筈も無く、その場その場の思いをお互いにディベートしていた。

「里美、あれ見てみてよ。」

そう言っただアニーはずっと端のテーブルを顎で指した。なにやら男子二人で神妙な話をしている。表情は双方共に真剣だ。

「へー。男子もたまにはサシで真面目に話し合ったりするんだね。同じ学年の人じゃないでしょアレ。先輩？」

「里美ドンピシャ。あれ三年生。しかもウチら、今リアルタイムで凄い瞬間を目撃してるよ。」

「アニーもそういうゴシップじみたの昔から好きだね。で、なんなの？」

「落ち着いて聞いてね。あれ、あいのりという帰国チケットもらってる状態。」

「へ????全然意味不明。なにそれ。」

「告白してるって事だよ。」

里美は一瞬を過ぎてもアニーの発している内容が理解出来なかった。

「は？告白って？まさか…」

「そうですね。あの人、ゲイらしいんだよね。」

そのような需要と供給の世界が非現実ながら存在するという事実を、里美は頭で理解していたつもりではいたものの、実際に目の当たりにすると異性とは言え衝撃を隠し切れないでいた。

「アニー、なんでそんな余計な情報ばかり仕入れてんの？築地のオッサンもびつくりだよ。」

「うちのクラスに梨元勝レベルのゴシップフリークがいてさ、三年生に同性愛者がいるって触り障りウワサになってたんだよね。んま、こちらは異性だから関係無いっちゃ無いけどね。はははは！」

アニーの不謹慎な笑い声と同時に男子二人のうち一人が席を立ち、青白い無表情のまま学食をそそくさと出て行った。

一人ぼつねんと残された三年生であろう先輩は、目の前にあるパツクのウーロン茶に手を付けないままテーブルにうつ伏せた。

「三月の里美を見てるみたいでなんか気が滅入るわ。」

ドン引きしているアニーを尻目に、何を思い立ったかのように里美はいきなり席を立ち、その先輩にズカズカ歩み寄っていた。

後先考えない無鉄砲な行動も十六才の特権だとばかりに、里美は名も知らない三年生の男子先輩に向かってこう言い放った。

「ちよつとアンタ！学食は公共の施設よ。電車でゲロ吐くのが犯罪な様に、男は外で泣き顔を見せてはいけないのよ。だからジメジメした男って嫌い。アンタみたいな男と私が同類項なんて考えたくも無いわ。イライラ以外しないからいい加減に消えてくれない？ナヨ男先輩。」

里美は本気でスイッチが入っていた。ベクトルだって当然ノープレランに違いない。

「同類項？女の気持ちを理解したいと数年間我慢してきたけど、もう限界のようね。」

里美に女言葉全開で口を開いた鎌田は、何かをあきらめた表情のままパツクのウーロン茶を飲んだ。

## シックネス・フロム・ザ・里美

「テレビとかではよく見るけど實際目の当たりにしたらドン引きつて、顔に丸々書いてあるわよ。私はこの数年間、全校生徒分のそんな表情を見てきたわ。動物園で見たパンダが予想以上に汚かった、みたいな顔をね。同類頂つて？あなたもしかしてレズビアン？」

悲しみに暮れるどころか、饒舌に語り始めた鎌田に里美は思わずたじろいだ。

「ち、ちちち違うわよ！異性に一杯食わされたもの同士…いや、アンタの場合は同性か…あーもうややこしい！とにかく、わわ、わたしはれっきとした男好き…といったら誤解が…痛い！口内炎噛んだ！」

里美は一人でテンパリまくっていた。だったら初対面の先輩、しかも男、しかもゲイにアクセル全快で声なんて掛けなきゃいいのに…と、アニーは遠めで見守りながら思ったが、「やれやれ、いつものが始まったよ」風な溜め息を一つ漏らし、奇妙な二人に歩み寄りて行った。

「先輩サーセーン。このコ、一日一回我を忘れて人に突っかかる病気なんです！一億人に一人が発症すると言われている『怒った時の泉ピン子』っていう難病。日本ではこの子とピン子しかまだ発症例が確認されてなくて…」

「アニーっ！誰が好き好んで幸楽切り盛りしなきゃいけないのよ！せめて『ウンチクたれる川島なお美』の発症で済ませたいわ！」

「だから先輩、すいませ〜ん。ピン子となお美の顔に免じて許して下さい〜ん。パツクのウーロン茶くらいだったら奢りますよ？職員室の給湯室で。」

里美は全身の力が抜けた。アニーの調子の良さと、呆れ切った鎌田の表情の狭間で里美は自分が患ってしまった難病、「怒った時の泉ピン子」の発作を悔やんでいた。

「私がM-1の審査員だったら、文句無く予選敗退よ。アンタらお笑いの世界に走って親泣かす事だけはしない様にね。アンタの方なんてただでさえ難病持ちなんだからさ。さ…里美ちゃんていったっけ？」

「あ…ハイ、先輩。この度はアングリーピン子が失礼致しました…。謝りますごめんなさい。でも真面目な話、本当に私は難病に侵されているんです…。」

アニーは青ざめた。

「ちょっとアンタ、この期に及んで何言ってるの？私が冗談のもりで言った病名、もしかしてミラクルで的中？」

「勇太病。口内炎。この二つに比べれば怒りのピン子も沈下、お喋りなお美も黙るわ。一億人に一人どころか、全世界でこの難病を患ってる人間は私しか居ないんだもん。ブラックジャックでもお手上げの病。」

「まるで『りぼん』ね。一六才のチンチクリンが全てを知った様な口聞くのは、先進国の日本じゃゆとりだって叩かれて終いよ。あ、

アニーちゃん？でよかった？そう思わない？」

「…なんか先輩って里美とかぶる気がします。これは直感。」

「テキストに思い付いた病名を人に擦り付けておいて何が直感よ！アニー、先輩、よく聞いて。私は男が嫌い。先輩は男が好き。この一点だけはかぶらないわっ。」

「でも結果論で男に一杯食わされてきたところはかぶってるよね。」

アニーの返す刀に里美は打ちのめされ、黙ってしまった。

「アハハ。なんかもう、アンタ達見てたらどうでもよくなっちゃった。私もう今年大学受験だからさ、モヤモヤ残すの単純に嫌だったんだよね。こうなるのなんてミエミエだったし。一つ一つの結果にいちいち泣いても正直になれる訳じゃないし。大学に入学出来たとしても、私は葛藤しながら講義を受けていたいのよ。」

「先輩、一八才のチンチクリンが全てを知った様な口聞くのは、大学じゃゆとりだって叩かれますよ？もうそろそろ、行こう。ね、里美っ。」

アニーは里美の頬を軽く二回叩いて、置きっ放しにしていたカバンを取りに、元のテーブルに戻っていった。

「先輩、色々生意気ぶっこいてすいませんでした。私も難病と葛藤しながら授業受けます。下校のバス間に合わないからもうそろそろ行きますね…。あ、か…鎌田先輩でよかった？」

「あ、カバンに付けてある名札見たのね。そう、鎌田。よろしく

ね。ピン子さん。」

「里美だっつーの！」

そう言い捨てた後、慌てて里美はカバンを取りに戻り、下校のバスに向かって走っていった。

## フレンドシップ

里美は入浴後、ビタビタに濡れた髪のまま勇太から受信したメールをポチポチと消去していた。

元彼の受信メールを片端から消去するという行為自体、女々しさに拍車をかけている様でイヤだったが、およそ三ヶ月間も携帯内にメールが残ったままという事実そのものが、いつまでも里美に執着を捨てさせないでいた。

「ハア？卒業するから別れるう？なにそれ。国語は成績良かった方だったけど、そんな日本語の意味習ってないし。ワケわかんない。」

「里美も広い大海に船出して世界の大きさを知るべきって事だよ。」

「勇太、アタマに虫でも湧いた？冗談に逃げないですよ。説明してよ。説明されても理解する気なんか無いけどさ…。」

「ごめん…他に好きな人が出来たとかじゃないんだ…。ただこう…辛かったと言うか…。俺の器では里美は荷が重過ぎたと言うか…うまくいえな…へぶっ！」

里美はムカつきを抑えられず、勇太の鼻っ柱に頭突きをかました。

「そんな漫画でも言わない様なクソ台詞求めてんじゃないやねーっつもの！私を思いやるなら卒業しても付き合い続けやがれ！このダメ男！うわあああああ」



チェリーブロッサムレインの中学卒業式、里美は学び舎の別れとは全く関係の無い悲しみに包まれ、他の卒業生とは違う内容で大粒の涙を流していた。

勇太は優しい男だった。その優しい男という生物は、愛とは違った疲労感情の方が膨れ上がってしまう。中坊の恋愛なんて押し付けあってパンクするというマッチメイクが定石となっているので、勇太の選択は実に若さの定義に沿った正しいものだった。

里美と交際中、大海に船出しなければと感じていたのは誰でもない勇太本人であった。

里美の傍若無人なアンチコントロールっぷりでは、マッチのドライビングテクニクでもアイウォンチューベイベー ライドン っ てな具合には中々いかなかったであろう。

「わかってる。わかってるよ。勇太はピエロ。里美はライオン。いったいそれって誰の為だったんだよ。」

そんな事を不毛に考えながら、里美は勇太のメールを全て消し終えた。

…と同時にメール着信音。

アニーだ。

添付されてきた写メを解凍すると、岡本信人の写真が画面上を埋めた。メッセは無い。

今日のピン子ネタに被せてきたのであろう。どシユールなアニーのメールに、里美は思わず含み笑いしてしまった。

いつもだったらスルーするのだが、里美はあえて返信した。

「冗談に逃げるのもいいね」

返信されてきたアニーにしてみれば岡本信人以上のシユールなメ  
ールであるが、里美は大真面目だった。

里美は、大海に船出する準備の為、生乾きの髪をドライヤーで整  
え始めた。

## チェンジ・ザ・ワールド

西部橙高校の中間テスト期間が終了した日の午後の授業は無い。里美は体育館正面の階段に座り、購買で買った湿気ったコロツケをハムハムと食べながら、アニーを待ち合わせていた。

「何してんのよこんな所で」

久々に聞く気色悪い声。思わず振り返ったら、鎌田が内股気味で立っていた。

「あ、トウリース！鎌田パイセーション！アニー待ってるの。テストも終わった事だし、これからプリリーガールズは柏というスラムに刺激を求めに行くってプランなワケ。」

「とんでもなくポテトなプランね。柏がプチ渋谷なら大宮はプチ池袋？何でも近場で済まそうとすると、百均で事足りるアウトレットガールズになるわよ。」

「そんな発言、柏レイソルサポーターが聞いたら炎上間違いないよ。イモでケツコーナリ〜。イモナリ〜。キテレトウ〜。」

ド下手過ぎるコロ助の声真似をしながら、里美はコロツケをたいらげた。

クラスの男子にも噂が広まるくらい男嫌いだったはずの里美は、何故か鎌田には友好的だった。

そこはアニーが同類項としての括りを結んだ仲だからなのか、単純に鎌田がカマだからか、どちらにしても里美にとっては今はどう

でもいい事だった。

里美は鎌田に対して大海の予感をバカ話で誤魔化していたのかも  
しれない。

間違いなく里美は何かの始まりを感じていた。

「あ、アニー来た。」

「あ、同類項ワンペア。お待たせ。」

アニーは来るなり、カマとはいえ先輩を思いつきり指差すという  
体育会系の部活なら三時間程正座させられそんな無礼行為を平気な  
顔してクリアした。

「鎌田先輩もくる？ポテトタウン柏。」

「私は学食で受験勉強なの。アンタ達もそのうち私みたいにイヤ  
でも銃をペンに持ち替えた戦争に巻き込まれるんだから、今の内に  
遊んでおきなさい。イモは防弾チョッキ着ないとすぐに妊娠するわ  
よ。文字通りタマには気を付ける事ね。やだんも興奮してきち  
やったから。」

里美もアニーもだめだこりゃといった感じで軽く手を振り、鎌田  
と別れた。

蒸したバスの車内でアニーが遅れた事を謝ってきた。

「ごめん！テスト中ガン寝しちゃってそのままホームルームなだ  
れ込んでたらしくてさ、自転車でコケる夢見たら……」

「ふが！つてなるよね。そんな男子うちのクラスにもいる。」

「寝惚けてわーっ！つって手を上げたら、たまたま文化祭実行委員決めてる最中だったらしくて。」

「え？まさかアンタ……」

「そのまさか。うちのクラスも適当よね。…んで遅れちゃった。」

「まるでドリフの酔っ払いコントね。」

「志村はイヤ。茶がいい。」

「なんで？」

「ハゲてるから。」

「茶だってハゲヅラかぶるじゃん。」

「地毛の問題よ。あーあ、ハゲはイヤ。」

話がローリングしまくって、文化祭実行委員の話も宇宙の彼方へ消えていってしまった。

里美とアニーはお互い勢いで喋るので、こんな事はよくあるどころでは無い。

しかし、このバスの中で里美はそのビッグバンの切れ端を掴む事に成功していた。

「大海ってのはこの事か。神様…」

バスが駅に着くまで、アニーはドリフの話を引っ張っていた。

## スリープ・ユア・ジーザス

アニーは、初夏の夢魘を思い出していた。

小学二年生だった頃の六月末、アニーこと田淵奈菜は実の母、田淵良江の遺影に目を合わせられないでいた。

奈菜は祖母に抱かれながら、声にならぬ声で一生分の涙を流し続けた。

昭和六二年六月二十日、寝坊した奈菜を野田市立山吹小学校に車で送った帰り道、国道十六号線の宇宙センター前、対向車線のトラックと正面衝突事故に巻き込まれ、田淵良江はそのまま帰らぬ人となった。

トラック運転手からは多量のアルコールが検知された。

「奈菜、今度ママの方が寝坊したら、ママのお願いも聞いてよね  
」！

田淵良江が我が子にかけた最後の言葉である。

寝坊どころか、母が二度と目を覚ます事は無くなってしまった。

幼い頃から母子家庭で育った奈菜は、離婚していた父が焼香に訪れていた時も泣き崩れていた。

奈菜の後日談では、泣き過ぎてよく覚えていないという。

通夜に参列した里美は凜とした表情で良江の遺影に手を合わせた。

この日以来、奈菜をこれ以上悲しませるもんかという母心にも似た感情が里美に根付いていた。

「私はあの日以来、アニーが笑えば大体の事は楽しいの。それは、私の大体の事はアニーのお陰って事だと思っよ。」

良江の三周忌で里美は遺影にそう呟いた。

学食のざわめきは奈菜にあの頃の眠りをフラッシュバックさせた。初夏の夕風は、奈菜にとって辛い。

「ハイホーツ！ジユ・テム・アニーサ〜ン！」

里美が緊張感ゼロ丸出しの声でいつもの学食テーブルにうつ伏したアニーを呼んだ。

「そうか、これが願いだったんだね。ママ。」

奈菜は思った。

初夏という悪魔は私の隙を狙っているんだ。

「それは、私の大体の事はアニーのお陰って事だと思っよー

「ジーザス！アイウォンツ！ユアラヴィイイイ！」

「あ、アニー……。だいじょぶ？学食にマリファナの食券は無かった筈だけど。」



「あんたはどうしようもないって意味よ。だから夏ってあんま好きじゃないわ!」

「…っあ!あそこに鎌田いるじゃん!おーい!ボーイジョージ!」

「進学を賭けた博打の邪魔しないでくれる?アンタ達二人が選挙カーに乗ってたら、それだけで選挙法違反になりそうだわっ!」

「だったら図書室行けよ!あはははははは」

里美とアニーは口を揃えて言った。

タメ口もお互いに気にならないようである。

毎日ケタケタと笑い合う三人は、学食に奇妙な空気を振り撒いていた。

その笑い声を、学食厨房内で皿洗いをしているパート婦、円代は考え事をしながら聞き入っていた。

## スイッチド・サマー

「うわ。」

円代の洗っていたカレーライス皿がシンクの中で割れてしまい、思わず出した声と、里美の食べようとしたコロッケが床に落ちてしまい、思わず出てしまった声は一致した。

どちらも軽く溜め息を吐きながらも「まあいいか」と呟き、頭を切り替えて日常の波へと戻っていった。

それは里美の気付かないもう一つのビッグバンであった。

「文化祭の準備って夏休み前からなの？随分と前倒しなんだね。」

落ちたコロッケに意味無く息をフーフー吹きかけ、何事も無かったかの様に食べながら里美は言った。

「うーん、コレとってあまりやる事は無さそうなんだけどね。何せ夢の覚め際に決まったことだしさ。」

アニーは少し気だるい様子だった。

「つつても、毎年芸能人とか呼んでるよね？去年、アニーと私が見に行った時はネプチューンが出て、体育館入場規制かかってたじゃん！」

「あれは生徒がブッキングしてるわけじゃないでしょ。うちは一年生だし、もっと地味な仕事任される事になるんじゃない？ゴミ管理

とか。あまりガチガチになる様なら嫌だな。」

「アニー！せっかくの文化祭だしさ！なんか面白い事うちらでやらない？」

「おっ！DIYだね！そういうのがないと文化祭なんてヤンキーとビッチの悪ふざけパーティーになるからさ！私もそんな奴らの為に焼きソバ焼くのなんてまっぴらだしね！」

「でしょでしょ！？」

「…で、面白い事って一体なにすんの？」

「…何が…？えーっ…と…お…面白い事。」

「え？あ、ああ…おも…面白い事…ね…。」

「うん…おも…白い…。」

「…と…いう事…。」

「……………」

「…。」

里美とアニーはそのまま黙ってしまった。

「それじゃ、文句言わずに焼きソバ焼くしかないね。」

二人の沈黙を見かねた円代が学食のテーブルを拭きながら優しく話しかけてきた。

ああ、聞いてたの、といった感じで里美は照れくさそうに返した。

「ねえ、学食のおばちゃん。楽しい事っていざいわれても、全然思い浮かばないもんだね。それに比べて楽しくない事なんていくらでも思い付くのにな。もったいないよね。」

「うーん…。なんだって最初から楽しい事なんて無いと思うよ？物事ってのは大したもんじゃないんだから、『楽しく』しちゃうばいいんじゃない？…なんてね。それに、おばちゃん、ってちよつとヒドくなーい？アタシまだ三四才だよ？そんなに老けて見える？！」

「あ…、ごめんなさい！はじめましてで失礼過ぎたね！…でも、割烹着なんて着てたらキョンキョンだってソバ屋のおばちゃんになっちゃうって。」

「割烹着のキョンキョンだったら『ESSE』の表紙くらいはきつとクリアね。…私は円代。よろしくね里美ちゃん。そっちのお嬢ちゃんは…アニーちゃんだったっけ？」

「え？なんでウチ等知ってんの？」

「あんだだけ毎日大声でケタケタ騒いでたら皿洗いながらも聞こえるわよ。学食に出入りしてて、アンタ達二人の名前知らない人はいないんじゃない？あははは。」

「…なんか少し恥ずかしいね！どーでもいいけど、円代ちゃん、

オッパイ超おつきくない？ムカつくくらい羨ましいんだけど。何力ツプ？」

「ドラえもん描いてるほうの不二雄カップ。アンタ達こそ、そのブラジャーに納まり切つてない無神経さと悩める若さもムカつくくらい羨ましいよ。私、そろそろ仕事に戻るね。今度一緒に茶でも飲みに行こうよ。アンタ達未成年だし、居酒屋連れてく訳にもいかなからさ！」

「んじゃ今度三人で楽しい事考えようか！駅前のKFCで！」

軽く頷きながら手を振り、円代は厨房へと戻っていった。

「楽しくする…か。なるほどね。楽しくしたい事を考えればいいのかもね。」

「どうやらライオットの始まりみたいだよ。里美…。KFCだ！行くぞ！KFC！」

「あ、アニースイッチ入った…。うーん…Fカップか…。」

里美とアニーは迷いながらも、武者震いを隠そうとはしなかった。

## プロジェクト・S（里美）

「ゴクヒ カイギ オコナウ アス ガクシヨク ショウシユウ  
コノ メールハ ショウキヨ セヨ グッドラック」

自動的に消滅する「007」のカセットテープならまだしも、相手に「消してくれ」と頼んでいるトホホな内容。しかも学食集合じや極秘もクソもない。幸運を祈られてもありがた迷惑だ。

しかも、受信者全員のメール差出人欄に思いつき「里美」と出ている。

ミッションに選ばされたアニー、鎌田の二人は「なんでやねん」と、携帯に向けて突っ込んでいた。

そしてミッション当日、ソルジャーA田淵、ソルジャーB鎌田は、指示通り秘密アジト（学食の隅）で鬼教官里美を待っていた。

「おー、ゴクローゴクロー。待たせたな。」

里美は浜田省吾が掛けている様なタレサングラスを装着し、意気揚々と登場した。極秘どころか学食にいる全ての人が冷たい視線を浴びせられていた。どうやらガチの様でタチが悪い。

「里美…。難病も末期に差し掛かった？気をどうか取り戻し…」

「シャラップ！ソルジャーA田淵！口を慎みたまえ！君はラピュタ王の前に居るのだ！」

もう設定がこの時点でメチャクチャである。ムス力暴走。

「アタシの志望校よりコッチの方が倍率高そうね。だとしても今は出会った事を後悔してるわ……」

「だ〜ま〜れい！ソルジャーB鎌田！地球には間違いなく引力があるのだ！」

時計台から三回落ちたジャッキー・チェンもNGシーンにこんなのは使いたくない筈。

何故か円代が三人分のお冷を持ってきた。これじゃ中華料理屋の「決まったら呼んで下さい」状態の家族である。

ようやく浜省里美がミッション内容を語り始めた。

「来たる九月ホニヤララ（この時点では日程が不明だった）の橙祭。そのミッション名を、あ、……………」

もうこの時点でソルジャー二人は「帰りたい」しか思っていないなかった。

「ハハハ、ハッピーウー……シマスッ！！！！！」

もうここまでできたら「ものまね王座決定戦」のファイナーレである。

バン！

ババン！

バババーン！

目の前に茶封筒が正月カルタの様に勢い良く置かれた。

「各自確認セヨ。」

お前は韓国スターか。とツッコみつつ、アニーが茶封筒を開け、  
鎌田が中身を取り出した。

静かに中身の用紙を広げるソルジャー二人の目に飛び込んできた  
衝撃の内容……………！



「ハズレ」

「いつやー、やつぱ思いつかなくてさ、二人の知恵をお貸し頂きたいと…アレ？奈菜さん？鎌田センパイ？夏はまだ長いっすよ？あれー！ちよつとちよつと！帰らないでーお願い！シャレ通じないんだからーもー！」

アニーと鎌田はマジ切れ気味に学食を出て行き、里美は一人タレサンのままうなだれていた。

律儀に円代が「もう閉店ですよ」と言わんばかりにお冷を三人分片付けた。

その夜、ソルジャー二人の携帯に、

「土下座しながらこのメールを打っています。まことに  
もうしわけありませんでした」

という、ヘナ教官からのメールが届いた。今回は消去の支持が無かったにも関わらず、優秀なソルジャー二人はそのメールを自発的に即消していた。

今回、里美のコントにまんまと付き合わされたアニーと鎌田、そして円代。里美は数日に渡り凄まじい怒りを買う事となったが、そ

れは真剣の裏返しである。

個々に密かな革命を企んでいるのは、里美も、アニーも、鎌田も、  
田代も、共通の思いだった。

…とはいっても、里美みたいなめんどくさい奴が実際にいたら  
普通に嫌がられます。

これはアニー、鎌田、田代の器アゲではない…。と、思う。多分。

## ネクストミッシヨンス

「えー！円代ちゃんって、バンドやってたのー?!」

あのグダグダコントから数日、里美とアニーはパート終了後の円代を誘い、東武野田線川間駅前のKFCでミッシヨンを練り直していた。

「まあ一応…ね。」

「凄いじゃん凄いじゃん！何やってたの？何？」

「ドラム。じゃんけんで負けて。」

「きゃー凄い凄い！バンドって超カッコいいじゃん！CDとか出した？まさかデビューとか…」

「デビューはしなかったけど、『イカ天』には出た事あったよ。」

「うわぁ…ホントにすごいなあ…。円代ちゃん、そこまでいってなんでバンド辞めちゃったの？」

「まあ…色々あったんだよ。旦那も子供もいたからね。家族が夕食待ってるのに、いつまでも自分だけ遊んでらんなかったしさ…」

「

「ふーん…。そうだったのか…。もったいな…あ、ごめん。なんか余計な事聞いちゃって。」

「無神経な里美らしくないね。いや、いいんだよ。もう過去の事だしさ。ドラムももう十年くらい叩いて無いし。」

「円代ちゃんのドラム、聴いてみたかったよ。」

「ありがとう。アンタ達は音楽好きじゃないの？楽器とか興味無いの？」

「私は小学校の時、リコーダーのテスト居残り練習させられたもん。」

「アニーは『エーデルワイス』も満足に吹けなかったもんね！」

「里美だって『荒城の月』の作曲者は？って問題で『荒俣宏』って書いてたじゃん！どんだけオカルトな作曲家なんだよ！渋過ぎだろ！」

「そうじゃなくてさあ…。ロックとか聴かないの？影響される年頃じゃない？今流行ってんのあまりわかんないけど。」

「里美は、ジャン・レノをジョン・レノンと勘違いして、元ビートルズのメンバーが俳優やってんだと最近まで本気で思ってたんだよ！」

「だって顔少し似てるじゃん。」

「あははは。そこまで音楽に無頓着だと逆に気持ちいいね！」

「ちよっと！円代ちゃん！音楽に興味ないわけじゃないよ！私、

パンクが好きなんだ。GREEN DAYとか。Hi-STAND ARDとか。」

「おつ。カッコいいじゃん。ハイスタ。私もパンク好きだよ。THE DAMNEDとか。アニーちゃんは？」

「私、ジュディマリ好き。YUKIちゃん超かわいいし！」

「元プレゼンスのRADYのバンドだね！あれはグラミーな由緒正しいJ-ROCKだね！」

若干のジェネレーションギャップはあるものの、話題は何とか通じ合ってる様である。

「でも、円代ちゃんみたいに楽器は出来ないよ。去年の橙祭でバンド演奏してた先輩が居たけど、カッコよかったもんな。ウチ等には到底不可能な芸当だよ。」

「私のドラムだって同じ様なもんだよ。もう全然叩けないから、エアドラムなら自身あるけど。あははは。」

「は？えあどらむ？なにそれ？洗濯機みたい。」

「よく『エアギター』とか言うじゃん。そのドラム版。楽器は持って無くても、BGMに合わせてさも叩いてる様に見せかけるパフォーマンス。世界大会とかあるんだぜ。」

「へ。そうなんだ。それってエアパート全部あるの？」

「は？」

円代は目を丸くした。

「だーかーらー。エアバンドってあるの？さも演奏してるかのよ  
うな楽器持ってないバンド。」

「なにそれ…。聞いた事無いよ。そんなの。まさか里美…。」

「それだよ！やろうよ！エアバンド！楽器持って無いし、買えな  
いし、弾けもしないんだから丁度いいじゃん！」

里美の発想にアニーも円代も開いた口が塞がらなかった。

その夜、早速交換したメルアドを通じ、円代の携帯に里美からメ  
ールが送信された。

「コレヨリ エアバンド ケツセイ ゴクヒ カイギ ヲ オコ  
ナウ アス ガクシヨク シュウゴウ ナオ コノ メール ハ  
シヨウキヨ セヨ ゲッドラック」

またまたヘナ教官里美からのミッションメールだったが、アニー、  
鎌田、円代の三人は命令を無視し、メールを消去しようとはせず、  
眠れない程の興奮を抱えつつ、ミッションの朝を迎えたのであった。

## キス・ミー・ベイビー

「是より、エアバンドを結成致します。」

里美のミッション会議は相変わらず極秘でも何でもなかったが、今回はタレサングラスも掛けておらず、目は真剣そのものであり、何かを確信した含み笑いさえ浮かべていた。

「橙祭野外ステージにおける『橙ライブタイム』に出場する。目標は5曲エア演奏。練習期間は約二ヶ月。練習場所は春日部、越谷、柏のいずれか。それぞれの任務を発表する。」

この前のコントとは裏腹に大真面目な里美教官を前に、三人は軽い緊張を覚えた。

「パフォーマンスプロデューサー、マル！」

「はい。」

パート休憩中の円代が、頭に巻いた三角巾を取り返事をした。

「エキゾチックマネージメント、カマ！」

「はい？」

よく分からない役職名だが、鎌田は返事をした。

「コミュニケーションドメーカー、アニー！」



「はい！」

元氣一杯にアニーは返事をした。

「そして、鬼教官の里美です。皆の欲する物は何だ？言ってみる！」

「サプライズ。」円代は言った。

「ビクトリーよ。」鎌田も続く。

「ライオットだね。」アニーも同じ。

「メモリーじゃないぜ。レジェンドに向かうんだぜ！やってやるぞ！オメー等！」

「押忍！」

もはや盗んだバイクで十五の夜。土曜の集会じゃないんだから。

「教官！質問です！」エキゾチック・カマが手を上げた。

「なんだ？言ってみる！」

「バンド名はどうしましょう？」

「そう、鎌田。いい事に気が付いた！バンド名が無ければ選考書類も出せん！」

「何かいい案はあるんですか？」

アニーの質問に対し教官は、

「無い！」

即答で答えられ、ズッコケる三人。

「『三人寄ればポン酢の知恵』と言うだろう。皆のアイデアを寄せ合って、エクセレントなバンド名を付けるのだっっっ！」

教官のエクセレント・バカ発言にミツカン社員もビックリである。

「うーん、急に言われてもねえ……」

「絶対に覚えやすいバンド名がいいよね！」

アニーの意見は的を得ていた。

よくアマチュアバンドのライブで「名前だけでも覚えていって下さい！」というMCをしながら、バンド名は長ったらしい英語だったりする。見に来ている客は記憶力テストをしに来ているのではない。短く、覚えやすく、インパクトがあるバンド名が良いのは皆分かっているが、それが中々難しい。バンド結成後の最初の砦となるのが、正にバンド名なのである。

「『モテタイズ』ってというのは？」

「私、男なんかにもてたくない。その上、カッコよくない。嫌だ。却下。」

教官は男に厳しい。アニー撃沈。

「男嫌いなら『ファッキン・スクールボーイ』ってのは？教官にとってもワタシにとっても、ダブル・ミーニングよ〜！」

「それ、高校の文化祭選考で通る名前じゃないでしょ…。長いし却下。」

R - 指定の煽りを受け、鎌田撃沈。

「ちよつとお〜。教官もメンバーなんだから、少しは案出してよ！里美の考えた名前は？」

アニーの下克上にうるたえまくるへナ教官里美。

「え？あ？…ああ、名前…ね。あのう…ね。えー…つとお…」

ははーん、こいつ乗っかるつもりだな、とソルジャー三人は勘付いた。こういう奴は人の意見に文句言つまくるくせに自分の意見はゼロ。この時点で教官の信用はガタガタだった。いや、最初から信用なんてあったのかも疑問である。

そんな状況を見かねた円代が拳手した。

「はい！教官！」

「はい！円代ちゃん！いいよ！そういう姿勢！いいね！いいよ！その意見とてもいい！みんなも見習って！この目見て！円代ちゃんマジだよ！すごいいい！」

「…教官、落ち着いてよ…。アタシまだ何も言ってないし。」

「あわわわわ…。ごめん円代ちゃん。意見プリーズ。」

「『kiss me baby』って名前はどうか？」

「ん？キスミーベイビー？なんかリンドバーグの曲名みたいだね。どういう意味？」

「意味は無いんだけどさ。リンドバーグでもプリプリでもなくて、ワタシがドラムやってたバンドの曲名なんだよね。全部英語詞で、どうしようもない男と、どうしようもない女が付き合っ、絶えず優しくしてしまっ、お互い暴れたり泣いたり、仕舞いに共倒れしてしまっ、って内容の歌詞だったんだ。『イカ天』でその曲やった時は英語だからってだけで、音楽もロクに聴かない様なタレントかぶれに『わからねえ』なんて酷評されたよ…。それからさあ…。」

それ以降続く円代の昔話を里美は覚えていない。その「kiss me baby」の曲中に出てくる登場人物は、紛れも無い私だとシヨックを受けていた。

円代に勇太の件は話した事が無かったが、あまりにもな偶然の一致に里美の身体は小刻みに震えていた。

「里美も広い大海に船出して世界の大きさを知るべきって事だよ。」

勇太の言葉が何度もフラッシュバックする。

私は変わりたい。いつまでも勇太病を患ったままの男嫌いで居たくない。新しい素敵な恋だって本当はしたい。もう、「りぼん」み

たいな毎日はウンザリだ。この仲間達と西部橙高校をかき回してやりたい。その大海に出るきっかけが、このエアバンドになるかもしれないんだ。だからお願いします神様。神様…

円代がかつて、演奏していた「kiss me baby」という曲を里美は聴いた事は無かったが、その曲名の細胞を肌で感じ取り、里美は懺悔を繰り返していた。

「……………つてな事もあつたんだよねー。あ、ごめん。一人で喋り倒しちゃった。ごめん！教官く。やつぱだめ？キスつて言葉が選考引つ掛かるかな…あれ？教官？さ…里美？」

里美は号泣していた。

その涙の理由を知るアニーも、思わずもらい泣きをしていた。

「うぐ…うえつぐ…円代ちゃん…それがいい…じえつたいぞのなまえがいい…ひつく…あたじら…『ギズ・ビー・ベンベイ』…教官べいれい…ひい…えつぐ…。」

円代はいきなりの事態にオロオロし始めた。

「えー！どうしたの里美いきなり！何かワタシ悪い事言ったかな…?」

「グスッ。今回は円代ちゃんが無神経だったみたいね。その代わり、決まったよ。バンド名！鎌田はオケーイ?!」

「オケーイアニー！キスつて響きがとてもエロスーよ！ベイビー

アタイにキスしな！シット！最高の夏を迎えられそうだわ！イエエ  
エエエエイ！」

ブチ上がるアニーと鎌田。

まだ号泣しているヘナ教官、里美。

オロオロしっぱなしの名付け親、円代。

エアバンドグループ「kiss me baby」の四人は、橙  
祭という大海にようやく船を出港させたのであった。



やや投げつ放しスリーパーホールド気味に廊下に放り出されたアニー。ぽてんと座り込みながら、三時限目のチャイムが鳴った。

里美や鎌田、何より円代に合わせる顔がない。授業を抜け出し、重い足取りを引きずりながら教室へと戻った。

三時限目は日本史。ただでさえ退屈な年配教師の語り口が、今のアニーにはお経の様に聞こえた。

お経、念仏、南無阿弥陀仏、木魚の無機質な四つ打ちビート、線香の香り、涙の味。

田淵奈菜の母、良江が思い浮かんだ。弱った時にはいつも良江を思い出してしまう。

「はつ。いけない。忘れかけてた。感傷に浸るタイミングも時間も私には無いんだ。何より、私自身がそんな事を許す訳が無いだろ…畜生！」

母、良江は微笑みながら奈菜のまぶたの裏から姿を消した。

年配教師が黒板に向かい黙々と板書をしている時、アニーは隣の席のクラスメイトに「ごめん」と謝りながら息を殺し、教室を這い出して行った。クラスメイトは何も言わず、親指を立てている。

教室を出た途端、うろついている教師に見つかってもおかしくないスピードで廊下を激走し、円代が居る学食へ向かった。

「まるよちやあああああんんんんんっつっつ!!!!!!」

「!!!!!!!」



学食へ入るなり、アニーは全身の力を振り絞った声で円代の名を絶叫した。円代だけでなく学食にいるパート婦全員が振り向いた。

作業の手を一旦休めた円代に、事情を話すアニーの目には涙が溜まっていた。

「なんだそんな事かー。もう、誰か死んだんじゃないかとハラハラしたよ。んもう。アンタも里美も簡単な事でワンワン泣き過ぎだよ！別にその先生の言う通り、エアバンドなんだから私居なくても三人でやれば済む事じゃない。だからもう、ホラ、泣かないで。授業戻りなさい。」

「…絶対イヤ。」

アニーは泣き止んだが、厳しい表情で円代を睨み付けた。

「三人で妥協して教室にこもってエアバンドやるくらいなら、私はヤンキーとビッチ相手に焼きソバ焼くよ。バンド名になった『kiss me baby』って曲を知ってるのも演ったことがあるのも円代ちゃんしか居ないんだよ？その聴いた事もない曲の名前に里美があんなに自分を思い入れてるんだよ？鎌田が自分の受験勉強そっちのけで伝説に肩入れしてるんだよ？それをなんだよ、『簡単な事』だの『三人でやれば済む事』だのって。ふざけんなよ！面白半分のもりなら、最初から高校生のささやかな夢もて遊んでんじやねーっつーの！！このバカ！オバケオツパイ！早くカラアゲ揚げてきやがれ！！！！」

アニーは叫び倒し、涙や鼻水で顔中グシャグシャになっていた。

嗚咽を漏らし続けるアニーに円代は口を開いた。

「…ごめん。本当にごめん。私、なめてたんだね。ごめん。何なんだよ…最低じゃんあたし…ごめん…。」

「いや…。まるよちゃん…私こそ底なしに最低だ…。私が先生に軽くあしらわれたくらいで…チンケな責任盾にしてかっこつけて…まるよちゃんにやつあたりして…これからエアバンドやるのに…やるのに…絶対やりたいのに…もうだめなのかよ…うっうっ…もう…。」

もうアニーは喋れる状態ではなかったが、声を振り絞って

「私、先生に土下座してくる…。」

「はっ？アンタ何言ってるの？授業ブツチして職員室飛び込んだら、それこそ野外ステージ出場停止になっちゃうって…！あっ…！！！！」

円代が喋り終わらない内にアニーは席を立ち、学食を猛ダッシュで後にした。

…その時、里美は授業中に爆睡しながら、山の様なコロツケを食べる夢を見ていた。



## フォータイムス・ウォー

アニーは冷静だった。波が引いた様に、体育館前の階段に座り鼻歌を歌っていた。さすがO型とはいえ、切り替えの早さは円代も拍子抜けするだろう。しかし、それはすぐに感情的になるアニーなりの自分を見つめ直す方法であり、単純脳であるうが次の策を落着いて練るしかなかった。

「うーん…金の饅頭でも包もうか…」

教師がまるで悪代官扱いである。さしずめアニーは越後屋か。お主も相当な悪よのう…もとい、ただのバカじゃねーかそれじゃ。教育委員会にしょつ引かれる事間違い無しだ。

「ん??なんだか職員室あたりが騒がしい…???’」

異変に気付きながらも、アニーは結局三時限目をサボってしまった。

チャイムが鳴り、教室へ戻ろうとしたらざわめきが一層大きくなり、その喧騒が職員室に近づくにつれ大きくなっていった。人だかりが尋常ではない。

アニーもその野次馬に紛れて職員室を覗いた所、とんでもない光景が視界に飛び込んできた。

「何事ですか！校内で働く者を部外者扱いするなんて!!!」

「パートタイマー、用務員、保護者の人権侵害に当たりますよ！」

裁判所に申し立てます……！」

「西部橙高校に携わる者として認めてもらえないなら、パート業務をボイコットするまでです……！」

職員室内は騒然としていた。

割烹着を着た学食のパート婦達が六〜七人でストライキを起こしていたのである。

その先陣を切っていた者こそ、円代であった。

「ふざけんな！一年生追い返した学年主任……んっ……！今すぐ出て来いやゴルア……！」

完全に昔ワルでしたねアナタ。と思わず言いたくなる程の巻き舌で円代は啖呵を切った。

「ちよつとちよつと、困りますよ大勢で！生徒達も見ている事ですし……」

あっぴあっぴで学年主任の鷹瀬が出てきた。

「オイオイ、今回はよくも可愛い仲間大泣きにしてくれたなあオイ？んな権力煽った弱いモノイジメがアタイはいつちばん気に食わねえーんだよ！てめえーがアニーに……いやいや、田淵奈菜にワビ入れるまで、ウチら学食業務ボイコットすっからよ。どうしても弁当

食いたけりゃテメー自身でカラアゲ揚げろってんだ！以上！！！」

円代は最年少ながら、学食パート内を仕切ってたヘッドだったらしい。

アニーは影でそれを見つめつつ、円代に対して

「それって余計に出にくいよ円代ちゃん！！やり方もって考え  
てよ……」

……と、トホホな気分を隠せないでいた。

一方、四時限目が終わった後の学食は大勢の学生でパニックに陥っていた。

「えー、食券の払い戻しは放課後にて行います。えー、学食は本日営業致しません。えー食券の……。」

まるで武道館コンサートの場外整理スタッフの様に、体育教師が拡声器片手に呼び掛けていた。

その中には里美と鎌田もいた。

「どーなってんだよ鎌田！これじゃ購買のコロッケも買えねーっ  
つの……」

「里美！これはなんか裏で変な事が起こってるに違いないわ！ヤマ勘ならぬ、カマ勘よ……」

学食パート婦レディーズ連合は校長室にまで押し掛け、大人の話し合いとは思えない押し問答を、終日に渡り延々続けていた。

…翌日早朝、職員全体会議が行われ（どんな学校だよ）、今回のエアバンド出演問題からなる学食営業業務ボイコット事件、校内勤務者の在り方について校長から直々に説明があり、全校集会までが開かれる事態となった（ある程度、馬鹿馬鹿しい）。

結果、土下座の覚悟まで決めていたアニーは、学年主任の鷹瀬から逆に頭を下げられ、晴れて選考書類が受理され判を貰う事に成功する運びとなった。

それは同時に「kiss me baby」の橙祭野外ステージ出演の決定を意味していた。

アニーと円代は職員室を出た瞬間、ハイタッチをして喜び合ったのであった。

「円代ちゃん。本当にありがとうね。っていうか、円代ちゃん元ヤンだったんだね。まじで迫力あったよ…。」

「あんな鼻水だらけのズルズルな面、誰かに見られてたら嫁入りも出来なかっただろうね。見たのがアタシでよかったね。奈菜ちゃん！」

「ムカつく！泣きたくて泣いたんじゃないもん！口惜しかったし！！！！でも今思うと恥ずかしい…。」

「アニー……」

「へ？田代ちゃん、なに？」

「アタシ、何か嬉しいよ。ありがとう。頑張るわ！」

「へへっ。気付くのワントンポ遅いドラマーだな……！」

…その時、里美は野球部員の列に紛れ、カラアゲ定食の食券を並んで購入していた。



## ゴールデンボール・グレイテスト・ヒッツ

「えー、各自いー、えー、節度を持ったあー、えー、夏休みをお  
いー、えー、過ごし様にいー、えー、心掛けてえー、えー、ください  
いー、えー、終わりますうー。ウエツホン！」

いったいこのオッサンはこの話の中に何回「えー」を入れるのか  
と、ウンザリしつつ、延々続いた終業式での校長の話にピリオドが  
打たれ、全校生徒はこれから訪れる夏休みに胸を躍らせていた。

「しつつかしハゲ校長の話は中身がスツカスカだな。ふ菓子トーク  
だね。」

「ハゲとでーあーったオーデーコがー なーつーはーテカるから  
嫌い。」

里美との帰り道、スピッツの「空も飛べるはず」をとんでもない  
替え歌で歌うアニー。

夏休み突入の前夜祭として今夜は鎌田が内密にバイトしているオ  
カマバーに潜入すべく、里美、アニー、円代の三人で新宿二丁目に  
繰り出す計画を立てていた。

里美は帰宅後、母親に「東武動物公園の花火に行つて来るから帰  
り遅くなる」と伝え、家を後にした。

母親はまさか我が子が東武動物公園どころか、新宿のサファリパ  
ーク二丁目に向かつてるとは夢にも思わず、「あんだ、花火大会に  
は水筒持ってきたさい！水筒！麦茶汲むから！」と声を掛け、何

故かり美は首から水筒を下げた遠足スタイルで、新宿二丁目へと足を運ぶ事となった。

東武野田線梅郷駅でアニーと合流し、開口一番「なにそれ」と指をさされ笑われた。

常磐線を使い、日暮里乗換えをして目的地まで一時間。野田市民にとっては新宿まではちよつとした小旅行である。

新宿東口の交番前で円代と待ち合わせたのが、ポテトガールズの二人は新宿の物々しい喧騒に耐えられなくなり、交番前どころか交番の中に入ってしまった、完全に家出少女状態で円代の到着を待った。

「おつまた〜！何？アンタら新宿で遭難でもしたの？その水筒で命繋いだ？大変でしたね〜お嬢ちゃん達〜！さ、行こうか！」

「ちよつと円代ちゃん遅過ぎ！もう少してカツ丼出されるとこだったよ?!早く行こうよ!!」

円代は胸元をこ・れ・で・も・か!という程大開帳した服をまとい、完全に新宿の夜に溶け込んでいた。これで元バンドマンで子持ちつつつてもそりゃアンタ詐欺だよ!ってなもんである。

そんなクラブ出勤前ルツクのバブリー円代とは対称的に、Tシャツにハーフパンツのイモ姉妹二人は完全に眠らない街に圧倒されていた。

「円代ちゃん…、ホストに声掛けられまくってない…?うわあああ!ヤクザにホームレス…怖い!バイオレンス!」

「昔はゴールデン街通り抜けて、日清パワステに入り浸ってたもんよ。アンタ達みたいなカッコしてさ…あ！あそこじゃない？『クラブ・ナインスパイク』…。」

灰色の看板がチカチカと光っている。アニーは完全にビビッていた。

「なんか怖い…。ほんとに鎌田こんなトコでバイトしてるの…？  
円代ちゃん、お願い…先行ってよ…。」

「だーいじょうぶだったの！だらしない！さ、行くよ！」

円代は二人の手を引っ張って、地下へ続く階段を威勢よく降りていった。

店の中から大音量でマキ原ノリ之の「もう恋なんてしない」の大合唱が聞こえる。脅威だ。

「すいませー…。」

円代がドアを開けたら、淡いピンク色に包まれた店内の奥から、福の神の置物みたいなオカマがトコトコと近付いてきた。

「いらっしやあ〜い〜！ あらあ〜、三匹の子猫ちゃんじゃなあ  
〜い？んもお〜お嬢ちゃん二人はまだ未成年〜？なら今夜お酒はお  
チヨメよあ〜。」

男よりも野太い強烈なダミ声で福の神は一方的にまくし立てた。

「す…すいません…。改めて聞きますけど、ここはチャンコ鍋屋じゃないっすよね？」

「あらやだ！失礼しちゃうわね！ペチャパイコムスメちゃん！この後でたっぷりつねつねしちゃうんだからあ〜んもお〜っ」

里美には福の神があまりに、んもお〜んもお〜言うもんだから、自分の居る場所が牧場にも思えてきた。

「あの、ここに鎌田って奴働いてますよね？私達、鎌田の友達で…」

「ああら！！シンディちゃんのおフレンドお？！そりゃあもお大歓迎しちゃうわあ〜ママ！ママ！シンディちゃんのもだち三名様でえ〜す！！！！」

カウンター越しからママと思われる、演歌歌手の様なオカマさんが迎えてくれた。

「はじめましてえ、ようこそナインスパイクへ〜！シンディちゃんには週末だけだけど、シヨードンサーとして凄く助けてもらってるわ！ちよ〜どもうすぐシヨータイムだからゆ〜くりしてっくさいな！」

案内された席につくなり、里美の隣に先程の福の神が座り、アニの隣に座ったオカマさんはタレ目で前歯が長く、ポツチャリしていてまるでガチャピンの様だった。

「はじめましてえ〜メロンでえ〜す！よ・ろ・し・くねえ〜！」

うーむメロンさん。緑繋がりとしても苦し過ぎる。

「すいませーん！ビールとウーロン茶、あとグラス一つくださいー  
いー！」

円代がノツてきた。ギャル系のオカマさんがドリンクを運んでくる。

「はいはい、私はビール、アニーはウーロン茶、里美はグラス  
ね。」

「は？何で私だけグラスなの？！」

「水筒あるじゃん。」

里美は水筒に入っている麦茶をグラスに注ぎ、新宿二丁目で母の愛情を確かめた。

「それじゃあ、遠くから来てくれたシンディちゃんのステキな子猫ちゃんたちにく、カンパア〜イ！！！」

「カンパア〜イ！！！！プハア〜ツ！！！！染みるうううーっ！！！」

円代がビールを自らのドテツ腹に注ぎ込む。里美はこの時点で嫌な予感がしていた。

「もうすぐシンディちゃんのショーが始まるわよお〜！キレイ過ぎてもつつねつねしちゃうんだからあ…あぁっ！！！」

福の神の絶叫と同時に店内が暗転し、どこからともなくシンディ・

ローパーの「マナー・チェンジズ・エヴリシング」が流れ始めた。

赤ラメのタイトワンピースに揃えたキャンディレッドのハイヒール。

シャンパンゴールドのボブヘア。

キャンディポップなヴィヴィッドメイク。

退廃的にさえ思える大きなミラーボールがシンディを包む。

今年度に大学受験を迎えている鎌田利明は、里美、アニー、円代の三人の前で、夜の蝶シンディとして宇宙一輝かしい姿になり、その繭を破って見せた。

## ドラック・オア・ダンス

もはやシンディは鎌田利明ではなかった。

本物の女性も言葉を失う程美しく、艶やかで、脆いダイヤモンドの様な若さに満ち溢れていた。

「うわあ……」

その言葉を失っている女性陣三名は、女より女らしい鎌田の姿に嫉妬を通り越し、じっと見入る事しか出来なかった。

シンディが指を唇にあて、喉のラインから腰にかけてなぞっている。そのセクシャリティには溜め息がこぼれる程であった。

「シンディちゃんはね、十七の頃からココで踊っているのよ。風営法が厳しくなってあまり大っぴらには出来ないけれど、この妖艶さもあって新宿では知る人ぞ知る期待のホープなんだから〜！」

福の神が興奮気味に言った。その瞬間、BGMがVAN HAL ENの「PANAMA」に切り替わる。どうやらシンディは若さの割りに80'sが好みらしい。

アメリカン・ハードロックの縦ノリに合わせ、腰をジャイヴさせるシンディ。たったそれだけで、シンディはまた表情を変え、今度はデイビッド・リー・ロスの様に活発なアクションを交え、観客を煽った。それはそこにある筈の無いマイクスタンドまでがまるで鮮明に浮かび上がる様であった。

「キヤーキヤー！！！鎌田…！じゃなかった、シンディ超ちよ〜うカッコいい〜！！！！アタシも興奮してきたわ〜！！！！ぶんぶんっ！！！！」

アニーはウーロン茶を飲んでる割には少し落ち着きを失っていた。里美は、無理も無いか…と思っていたが、テーブルをふと見てみるとアニーがグビグビ飲んでいたのはウーロン茶ではなく、隣に座っていたメロンちゃんの水割りであった。アニーはステージに釘付けのあまり、テーブル上のウーロン茶と水割りをずっと間違えて飲み続けた為、既にへべれけになっていた。

「イエイイエーイイイイ！！！！シンディビューチホウー！！！！もつとやれ！脱げ！けつみせろー！！！！」

「んもつつ、お嬢ちゃんったら夕チ悪いわ…トホホよたくつ。」  
メロンちゃんはずっと水割りを横取りされ、本来アニーの飲むウーロン茶を仕方なく飲んでいた為全くの素面の上、少し呆れていた様子だった。

しかし、その暴走にブレーキをかける筈の保護者役、円代も泥酔状態だった。

「おう！コワツパ！！！！パイオツなら勝負すんぞー！！！！オイ！ビール足らねえつつつてんべ！ジャンジャカ持って来いやー！！！！」

福の神のアタマをピシピシ叩きながら、円代はビールを瓶ごとラッパ飲みしていた。



しかしシンディは動じない。表情一つ変えず自分の役に入りきっている。

過去に泥酔した客がグラスを次々とステージに投げ入れ、壇上がオペラグラスの様になっても、足に切り傷を負っても、迷わず舞い続けた経験も今は自身となり、シンディを新宿で踊り続けさせていた。

里美はサイド二人のリアル女性にウンザリしていたものの、ステージ上のフェイク女性（リアル男性とも言う）には羨望の眼差しを送り続けていた。

二曲舞い終わり、拍手と共に袖へと下がっていくシンディ。裏から里美達に歩み寄るオフフェイスも、そこは鎌田利明ではなく、紛れも無いシンディであった。

「来てくれてありがとうねえ〜！k i s s m e b a b y ガー  
ルズサイド〜！」

もう、水筒の麦茶を飲んでいた里美以外は手に負えない状態になっていた。アニーはもう水割りと解り切って飲み続け千鳥足となり、円代もベロベロの状態でオカマちゃん達に絡みまくっていた。

「なんかごめんね。他の二人出来上がっちゃって…。」

「イイのよ。こんなんまだ全然マシな方よ。アタシももう受験勉強で踊れなくなるかもしれないから、早い内に三人には見て欲しかったの。これで思い切りエアバンドにシフト出来るわ。今やったス

ページの百倍盛り上げるわよぉ〜！里美！ワクワクしてきちゃったあ〜！！やるわ！やるわよぉ〜！！！！」

「絶対やってやるわ！！！鎌田！！いや、シンディ！あんた最高よ！当然やるわっ！！！！」

ナインスパイクのママが挨拶をしてきた。

「水筒下げたアナタが保護者代わりとはね。ウッフ。」

「本当にスイマセン…。あの…円代ちゃんがビール飲んだのは別として、アニーが未成年にもかかわらず水割り飲んでた事は事故って事で、内密にしてもらえませんか…？」

「そんな事全然気にしてないわよ。何か壊されたわけじゃないしね。私達の方こそ、十八のシンディちゃんが踊っている件は内緒でオンナ同士の約束よ！」

「ん？女…同士？ああ、ああ…『同士』ね。オーケー！約束！それともう一つ聞きたい事があって…」

「何？」

「福の神さんってここでは何て名前なんですか？聞き忘れちゃった。」

「ああ、ハッピーちゃんね。本名、山田幸男。ああ見えてハッピーちゃん、普段は銀行員で妻子持ちなのよ。」

福の神でハッピーちゃんは幸男…「名は体を表す」という事は正にこの事だ。と里美は泥酔した二人を抱えながら思った。

ナインスパイクを後にした帰り道、アニーと円代は使い物にならなくなっていた。

「さとみちゅわ〜ん？ココ何処？あと何時間何分ニコニコプン〜？オエ。」

「ゴルア！里美！ペチャパイのくせに生意気だ！のび太のくせに生意気だ！ボケナス！」

里美は壊れかけのRADIO二人の介抱を野田市までするハメとなり、改めて水筒を渡してくれた母に心から感謝をし、自らは生涯に渡って酒を飲まないと誓った。



シンディの華麗なステージから一夜明けたアニーの状態はもつと酷かった。

自分以外の乗客右半分は水木を敷き詰め、残りの左半分は全て修造という状況下の中でトップスピンの百連発をクリアした様な朝。視界に飛び込んでくる世界は全て「ウルトラQ」のオープニング状態。頭蓋骨の中では狂った坊主が釣鐘を乱打しているに違いない激裂な頭痛に見舞われた。

アニーが人生初の二日酔いで地獄の沙汰を歩き来している間、里美は昨夜のステージを参考に、ライブの構想を既に練っていた。

なにぶん、エアバンドの前例や見本が殆ど無かった上、里美達には具体的な表現方法が明確にあるワケでは無かった。本物のロックコンサートとエアバンドライブの相違点、ダンスとの区別、カラオケとの差別、自由度の利点、臨場感の不利点等をピックアップし、普段の授業では決して見せない意欲で研究を重ねていった。

里美とアニーには知識が無かった。ギターに触れた事も無かった。シンディや円代の様な経験も無かった。

無い無い尽くしの中、彼女達には桁外れの発想力と行動力だけがあった。それを若さと言う者もいれば愚かと罵る者もいる。しかしそれは、一時期だけに突出する限られた能力であり、自分達にとつて唯一許された魔法であると信じてきた。

「やるしかないんだ。神様……。」

里美は思い込みを真実に近付けていく作業を黙々と進めていた。

まず、「演奏曲」を考える。これは見ている人が知っている曲、聞いた事がある曲程盛り上がる。とは言っても、全校生徒が知り、聞いた事があり過ぎて、大合唱さえ出来てしまう校歌などをチョイスしたところで盛り上がるワケが無い。だからこそ境界線が難しい。まあ、文化祭で校歌やる奴はいねーか。

里美は皆の知っている曲はもちろん、ライブとは人間が初めて口ツクを感じた瞬間の「なんだこりゃ！」っていう言い知れない衝動こそ欠かせないものだと思っていた。これ、正論である。

そもそも、バンドマンがバンドを始めたキツカケを語る常套句で「電流が走った」とよく言うが、だったら昔のFMWなんかキツカケだらけだったんじゃないかと思うがどうだ。どうもしないか。

里美は密かに燃えていた。

オーディエンスを全員ビビビと松田聖子の様にしたいぜ！心の岸辺に咲かせるぜ！血の色スイートピー！ウヘヘヘヘ！…ってそれじゃデーモン閣下だよ。

次に、「演出」を考える。前記にもあるように、エアバンドは「ダンス」や「カラオケ」ではない。誇張された演出が無いと仮想現実にもならない。オーディエンスは夢の瞬間を待ちわびているのだ。

そこに楽器が無くとも、在る様に。そこに音が鳴っていないくとも、

聞こえる様に。その声を出さずとも、届く様に。しかし、全て実際には無いのだからこそ、選択肢も無限大だ。

「だいたいなんだ？ゆがみってのは？音がゆがんでしまうのなんてプロ失格じゃないのか？！このゆがみとやらにウンチクたれてるエリック・クラプトンってオジサンもエアバンドやればいいのに！」

里美が参考資料として買ってきた雑誌「プレイヤー」の特集ページで、「目指せクラプトン！歪みエフェクター入門」のショット写真に写るクラプトンから吹き出しが出ている。ギターの神様も散々な扱いを受けながら金を稼いでると思うと実に涙ぐましい。ちなみに「歪み」とは「ひずみ」と読む。

最後に里美は「準備」を考える。自信というものは準備から生まれ、全てのタイトロープに繋がる。

良い事を想定し準備する事を「挑戦」と呼び、悪い事を想定し準備する事を「対策」と呼ぶ。成功を共有する為に挑戦をし、その足元を掬われない様に対策を立てるのだ。

要するに、テストでいい点取るには、よく復習してよく寝ようって事である。本番で頭に入っていないままグースカ眠りこけてしまったら、学力以前の問題になってしまっただけで笑話にもならない。名前書き忘れて0点取って同窓会のネタに引っ張られるのもキツイ。

そしてこれら全てを行動に移すのだ。Do itの背中ではどんな思考も無価値になってしまう。行動する事により、全ての栄光と、

全ての挫折が、自らの手で導かれるのだ…

「れ…る…の…だ…マル。と。よっしゃ！やっと『エアバンドのしおり』が出来た！」

k i s s m e b a b y という船が、浮かぶか沈むか試される  
橙際ステージまで、あと二ヶ月余りとなった。



## 春日部・ドリーミン

里美お手製の「エアバンドのしおり」は夏休みが中盤にもならないうちに皆ポロポロになっていた。

練習場所は春日部市にある豊春第二公民館の第一会議室。週に二回四時間、時には六時間もの練習を行った。初日の練習をここで行った時に公民館の人からアイスの差し入れをもらって以来、豊春第二公民館は *k i s s m e b a b y* のホームグラウンドとなる。現金なやつら。

選曲は一人一曲ずつで四曲、皆でもう一曲を決め、計五曲。各自集めた資料を基に演出面を練っていく。持込のMDラジカセからは選曲を編集した里美自作のMDが、割れた音で何度も何度も繰り返し流されていた。

「あのAメロの後半さあ、ビデオで見たらギターのケツに手を置きながら弾いてるんだよね。だから、こう…モーション大きく弾かないで、ツツツツ…ってやった方がいいかも。お客さん見渡しながらさ。」

アニーは「ミュートカッティング」というギター演奏用語も当然知らなかったが、持ち前の観察力でパフォーマンスは見逃さない。

「そんなジャンプじゃないよ。もっとこう、身体を丸めて…次の間奏のアタマと着地を合わせるんだよ！」

里美は細部にまでこだわり、一つ一つを構築していく。

「もつと内股になって、つま先を内側に向けて少し立てるのよ…  
そう！腰にグラスが乗るくらい突き出して、背中は出来るだけ反ら  
す！…そうそう！セクシーだわ！」

鎌田はシンディのショーテクを存分に伝える。

「ドラムの方が簡単だったかもね。目の前にあるやついくらでも  
叩けるんだもん。」

唯一の楽器経験者、円代は楽器を使用しない演奏の難しさを痛感  
していた。

「よしやーい！んじゃ最後に一曲あわせて終わりにしようか！」  
鬼教官、里美が締め曲をかけた。

再生ボタンを押して流れたイントロは、練習してきたどの曲とも  
違うものだった。

「ん？」「あ？」「え？」里美以外の三人が戸惑う。

流れてきた曲は斉藤和義の「歩いて帰ろう」だった。確信的に  
皆を無視し、イントロのギターをエア弾きする里美。肩幅以上に大  
きく足を広げて弾く様はまるでジョニー・ラモン。

その僅か数秒間の事件を察知した三人は「仕方ねえな、やるぜ！」

と言わずとも目を合わせ、同時にエアバンド・インしてみせた。

「これだ。」

里美は確信した。

片足を浮かせてダックウォークする。

無い楽器を天井まで突きつける。

バンドよりバンドらしく。

四分前後の海へダイブする。

「誰にもいえない事は どうすりゃいいの おしえて」

エアバンドというある意味模倣や擬態、虚構の固まりの様な行為は、相殺したい事が山ほどある里美達にとっては最大の武器だ。皆何かを求めてはいるものの、その何かの正体すらわからない。エアバンド、橙際、橙ライブタイム、そして何よりこの仲間こそが、その正体を知る旅だった。

練習を重ね、それを確実に実感していたのは里美だけではなく、アニー、鎌田、円代、k i s s m e b a b y 全員だったことは言うまでも無い。

「あー面白かった！みんな意外とイケるじゃん！」

「なんだよ里美…スゲー焦ったよ。いきなり違う曲かかるんだもん。」

「この曲好きなんだよね。」

「うん。私も好き。」

「オカマにも人気あるのよ。」

「これって斉藤洋介って人だっけ？」

「斉藤洋介は『人間失格』でオカマやってた人だよ！」

「ちがうわよ！三浦和義よ！」

「Jリーグの人？」

「いや、ロス疑惑のほう。」

「それはないでしょさすがに。」

「じゃあ歌ってるの誰よ。」

「つつーか腹減った。」

「私も。」

「私も。」

「んじゃ、春日部のジョリパスでも行く？ピザ食い放題！」

「そーですね！」 全員

いいともか！…と突っ込みたくなるが抑えてください。

色気より食気といったところの四人は春日部のジョリパス（時間帯によりヤンキーの溜り場となる）にて一日を絞め、それぞれの帰路へと向かっていった。

東武野田線春日部駅から梅郷駅までジャスト三十分。七光台駅を過ぎたところでアニーが里美に話しかける。

「あー疲れたー。やつぱさ、あそこの箇所もうちよい揃えたいよね！今日時間なくてあんまり出来なかったけど。」

「うん。もう少して学校始まるし、円代ちゃんもパート入っちゃうしさ。夏休み中には仕上げていきたいよ！」

「里美、あのさ。」

「ん？」

「いや…なんでもない。変な意味じゃないけど、今死んだら後悔しそっだな。私。」

「私だってそうだよ。ここまでやったんだし、やり切るしかねーじゃん。」

「エアバンドって最初聞いた時は冗談にもならねえって正直思ったもんね。里美、ふざけ半分だったしさ！」

「ふざけてないって！…でも意識は確実に上がったと思う。あの頃より。」

「びびらせたいよね。」

「うん。」

「誰を？」

「誰をつて…みんな。」

「特に誰？」

「言わせたいのかよ。」

「あはは。」

梅郷駅に付き、二人はいつもと変わらぬ挨拶をして別れた。

帰宅した里美は、今日の練習を録画したビデオを巻き戻して見る

準備をしていた。

途端、携帯が鳴り画面を見ると知らない番号からだった。

「は…？なんだこれ。誰？……………もしもし？」

電話の声は聞き慣れない男からだった。

「もしもし！邑背里美さんの携帯ですか？」

「はい…。失礼ですがどちら様で？」

「千葉県警交通捜査課、広井と申します。たぶち…田淵奈菜さん御存知ですよね？」

「はっっっ？？アニー…いや、田淵がどうかしたんですか？？？」

里美は気が動転していた。

「…宇宙センター前の交差点でトラックと衝突事故を起こしました…それで…」

里美は巻き戻したビデオもそのままに家を飛び出し、アニーが運

ばれた小針病院へと自転車を走らせた。



アイス・トウ・アイス

アニーは付き添いの祖母に肩を抱かれ、右腕に三角巾を着けて診察室から出てきた。頬に軽い擦り傷がある。

「ちょっと、アニー……………」

「骨、ヒビだって。」

「ヒビって…」

祖母の話では、自転車で青信号を渡ろうとしたところ、右折トラックの巻き込み確認不注意よっての接触。転倒し、右肘骨折を負ってしまったという。

全治三週間。

アニーは怪我をした事で滞ってしまうエアバンドの事はもちろん、母が亡くなった場所で事故にあったという精神的ショックも大きく、表情を強張らせて小刻みに震えていた。

「里美…あた…し…、ごめん…。」

「は?!何?ごめんって?今は余計な事考えないで治す事に集中しなよ…!?!はあ…でも少し安心したよ。まさかと思っちゃってさ

…。」

「ごめん…バンド…。」

「だから、今その事はいいって！あ、アニーのおばーちゃん…いきなり押しかけてごめんなさい…私、今日は夜も遅いのでおいとまします…。」

アニーはカブト虫をひっくり返したような顔をしていた。

その日を境に、kiss me babyの合同練習は精彩を欠いたものになってしまっていた。アニーは自宅療養、鎌田も受験勉強との両立の為か、講習等で練習を休む事があった。

その結果、里美と円代のツーピース・エアバンド練習が多くなった。ホワイト・ストライプスやライトニングボルトが二人で練習するのは当たり前だが、もともと四人だったのが二人になるのはキツイ。「笑点」の大喜利メンバーが木久扇とたい平では成り立たない様なものである。それは人選の問題もあるが。

夏休み最後の練習となったこの日も、里美と円代の呼吸は終始合わないままであった。

「だーかーらー、里美！そーじゃねえーって言ってんべ！？アタシがソロのときカブって前出てどーすんだっつーの！」

「円代ちゃんこそ、そこばっかにこだわり過ぎ！臨機応変って言葉もくない？」

「ああ言えばこう言うんだから里美は…。」

「なによそれ！どういう意味!？」

「あーわかったわかったもういい！次やるー次…。」

この日は、最後までギクシャクしたまままで練習を終えた。

公民館の人がくれたアイスの味を巡ってまで喧嘩するくらいであった。

「あー疲れたー！アンタと二人つきりだと別の意味でも疲れるわ！」

「なにそれ円代ちゃん。今日、いやに突っ掛かるね。」

「違うよ里美。アタシもオトナになんなきやって事だよ。アンタこそ突っ掛かってんじちゃん。」

「なんかアニーも鎌田もいないと思うと…さ。ごめん。」

「たまたま休んでるっただけでしょ。」

「たまたま!？アニーは怪我してんだよ!？休みたくて休んでんじゃ無いつつの!」

「だからたまたまじゃん。そもそもアニーが怪我したのだったア

イツの不注意もあつたんでしょ？自業自得っちゃーそうじゃね？」

「はあああああ！！？？円代ちゃんそれ本気で言つてんの！？冷たいにも程があるんじゃない？」

里美がアイスそつちのけで円代を睨んだ。

「冷たいもクソも無いでしょ。本当の事よ。アタシは今、ハラたつてんのよ。これからつて時にヘタな不注意で怪我なんてしやがつてさ…。里美は知らないと思うけど、アタシが生徒じゃないからつて理由で選考書類叩き返された時、アニーがギャンギャンに大泣きしながらワタシに向かってブチ切れしたんだよ。『遊び半分なら辞めちまえバカ！』つて。」

「え…？」

「思いやつたつもりで、『アタシ抜きで三人でやればいいじゃん』つて言つたのに。ヒドイよねアイツ。なのにさ、アニーは里美や鎌田に合わせる顔がないつて言つて、学年主任に土下座しに行きかけたんだよ？それだけはさせまいとアタシが文句つけたけどさ…。だからもう、アタシはアンタ達と年齢だ学生だなんだで付き合うのは辞めたんだよ。それが何だよ！死にもしねえ怪我だの、冷てえだのつてよ。信じてたアタシに恥かかせようとしてるとしか思えねーつーの。どっちが遊び半分だ？あ？言つてみるよ？」

円代が大人気なくヒートアップし、里美は黙ってしまった。

「アニーの怪我が治つた時に、鎌田が安心して受験と両立出来る

様に、じゃないの？二人とも戻った時に思う存分合わせられる様にやるんでしようよ！目の前の夢が少しコケたくらいで、ずっと先の現実オロオロさせるワケ！？だったら、ずっとそうやって表ヅラだけで部活ゴッコする事ね。はい、もうこの話はオシマイ！…里美、アイス溶けてるって。」

「…あ。」

里美のガリガリ君は、ソーダ味の汁と棒だけになっていた。

「…ごめんね。里美。ぶっっちゃけて話すと、里美達がスゲーうらやましいんだよ…。ホラ、アタシ…バカだったからさ！高校行かないでワルしてたし…。その仲間とノリでバンドやって、ブームにのっかってイカ天出たけどサツパリだったし。今思うとそんなマジじや無かったのかな。現実味無さ過ぎて。子供育ててる方がよっぽど戦争だったよ。それがなんだよ、エアバンドなんて楽器持たない音楽でこんなにクソ真面目にやるなんてさあ…凄いよ。本当に凄いよ。こんな仲間、あの時に私も欲しかったよ…。」

「ワルやって、バンド組んだんだし、全く仲間が居なかったわけじゃないじゃん…。」

「里美。そうなんだけど、あの時と違うのは、もう音楽を粗末にしたくないって思ったの。たとえ楽器をもっていない音楽だとしても、実際に楽器を持ってたあの時代よりも、リアルなものにしたいと思っただよ。…そして、それが出来そうな時が来たんだよ。やっと…アタシに…。」

「『kiss me baby』って曲名を提案したのも、その表れだったのかもね。」

「…きつとそつだと思っしょ。」

「出来るよ。」

「やるんでしょ。」

「当たり前でしょ。」

「随分言っね。」

「円代ちゃん、あのさ…」

「何？」

「アイス溶けてるよ。」

「…あ。」

円代のスイカバーが、スイカ汁と棒だけになっていた。

「…腹減った。」

「アイス溶けちゃったしね。」

「ジヨリパス行こうか！おごるよたまには！」

「家計を省みない主婦だね〜！」

「そのかわり今度アイスおごってよ？」

「公民館の人に言ってね！」

「ああ言えばこう言うんだから里美は…。」

高校入学後、初の夏休み終了三日前、そして橙際まであと一ヶ月となった。

## ダックリップス・フェスティバル

「えー、各自いー、えー、節度を持ったあー、えー、新学期をお  
ー、えー、迎える様にいー、えー、心掛けてえー、えー、ください  
いー、えー、終わりますうー。ウエツホン！」

毎度の事ながら、いったいこのゴルバチヨフもどきのオツサンは、  
話の中に何回「えー」をブチ込むのかと殺意を覚えつつ、延々続い  
た始業式での校長の話にピリオドが打たれ、全校生徒はこれから訪  
れる新学期に対し、各々の夏に未練を隠せないでいた。

「しっかし本っ当にハゲ校長の話は中身がスツカスカだな。ピー  
マントークだね。」

「ハゲ無い事 ハゲ出さない事 毛が抜けない事 ひっこ抜く事  
」

まさしく校長にとっては、それが一番大事」といったところで  
あるつか。

「アニー、右肘のギブスってまだ取れないの？」

「もうちょい……。リハビリしながらだからあと二週間くらいかも  
…ごめん。」

「謝られるの、もういい加減飽きたって。それより他にもアニー  
に謝って欲しい事なんて山ほどあるんだから！」



「えっ…？ワタシそんな知らぬ間に悪事働きつ放しだった？」

「うん。水戸黄門もサジ投げるくらい。」

「それってどうしようもないね。」

「でもアタシはそんなヨボヨボジジーより百倍優しいから、アニにはサジ投げないけどね。」

「ありがとう…助さん。」

「なんで格さんじゃないの？」

「八兵衛がよかった？」

「そういう問題じゃないでしょ！」

「ちょんまげはハゲの内には入らないから、許せる。」

「そういう問題でもないっ。」

どーい問題でもいっつーの。里美は新学期早々、学食でアニとバカトークが出来た事に安心感を得ていた。遠くでは鎌田が赤い下敷き越しに英単語帳を見つめ、厨房内では円代が生徒には不評であった鶏のチリソース定食を作っていた。

夏休みと言う束の間の自由を終え、再び蜂の巣の様な学び舎で秋の準備をする西部橙高校生は、早くも年に一度の橙祭に関する「あの噂」で持ちきりとなっていた。

「今年の芸能人ゲスト枠には田中三保が出るらしい」

それはファッション雑誌「nono-n」の専属トップモデル、田中三保が来校するという、まことしやかな噂であった。

橙祭には毎年必ず、芸能人やゲストが来校している。過去の人選をさかのぼると、小錦、ダニエル・カール、橋本聖子という、生徒達はモチベーションただ下がりラインナップであったが、昨年、一昨年にはネプチューン、つぶやきシローが来校し、そこそこの盛り上がりを見せた。

（ 著名人の方々ごめんなさい。でも事実、そうでした。 ）

特に今年は何か違う。

「オイヤベーよ！今年、田中三保来るらしいぜ！マジヤベー！激ヤベー！」

「アヒル口超カワイイ〜！三保ちゃん神〜！アタシもあんな風にかわいくなりたいつつ！」

「オイ、どーするよ！？田中三保が購買でメロンパン買ったら！？マジスゲー！」

「ねー聞いてよ！絶対三保ちゃんにワタシのウワバキにサインしてもらおう！」

「俺、田中三保と付き合えるなら死んでもイー！」

ウワバキはないだろうウワバキは。：第一、死んだら付き合えないし、田中も人間だから菓子パンくらい食うだろうに。

まったくもってポーン・トゥ・バカ達はえらい騒ぎようだった。中には真似してアヒル口写真撮ったら「スッポン」というアダ名を付けられたりする気の毒な女子もいた。月と何やらならぬ、アヒルとスッポン、てな感じである。

その田中三保が橙祭で来校するっつーのだから、そりゃーもー校内中、田中だの三保だの狂喜乱舞ワツシヨイ祭りであった。

「けつ。エロ餓鬼どもが」。ブラック里美が呟く。里美は田中三保が特別嫌いというわけではなかったが、皆が騒ぎ過ぎていた為、その波に乗る事を拒否していた。よくオリンピックとかワールドカップとかで日本中が盛り上がるときに、「別に俺、スポーツとか興味ないし」とか又カシヤがるアレだ。よくいるよくいる、そーいう奴って。

みつともないとどれだけ言われようと、里美は気に食わなかった。俗っぽい芸能人にたやすくなびく様な、軽い人間達の作る軽いバカ騒ぎがどうしても我慢出来なかった。

自分達は革命を起こすんだ。有意義な事でそいつらの目を丸くしてやるんだ。自分達以外の事件で喜びを共有し、自分達以外の責任で思い出を凶々しく貪る奴らを驚かしてやるのだ…。

怒り混じりながら里美はそんな事を考えていたが、以外にもその矛先は田中三保でも、それに騒ぐ連中でも何でもなかった。

「きつと私は心のどこかで勇太に認めてもらいたがってるんだ」

今となつては里美の心臓に巣食う蟲でしかない勇太こそ、泡を吹くくらい驚かせてやりたいと願う照準であった。

その温めてきたミッションを遂行するに対し、田中三保来校という殺戮兵器は鬼教官でさえ動揺は隠せるものではなかった。

「凄いねー。どいつもこいつも田中田中って。そんなに有名なの？アタシの時代でいうと新田恵利とかそんな感じ？」

作業がひと段落した円代が里美達に話しかけた。

「だれそれ？自殺したって人？」

「それは岡田有希子。女の子にワーキヤー騒ぐ様っていつの時代も一緒だね！私は文化祭なんて三回ともフケちゃったけど…。」

そこに鎌田が英単語帳を片手に加わってきた。

「…そんないいもんじゃないわよ文化祭なんて。苦労する人と、楽する人がハッキリとわかるイベントよ。まるでアパルトヘイトみ

たいで凄く嫌。」

「ふーん。難しい事知ってんのね。」

「受験勉強中ですから。…とある人種は汗水たらして先生達に怒鳴られながら走り回って泣いて、とある人種は教室で適当に遊びながら焼きソバ食って、虚構の青春を勘違いするのよ。アタシが去年焼きソバ焼いてた時なんて、大して何もしてない男子に『ネプチューンはじまっちゃうから早くしてよ!』なんて言われてバカバカしくなつて焼くの辞めちゃった…。」

「酷い話…。」

「でもね、ソバ焼いてる人にも、適当な人にも、来校した芸能人にだって、やるからには驚かせてやりたいのよ。私たちは、流れに乗って溺れるんじゃないで、川の調子を確かめて向こう岸へ渡るのよ。違う?アニー?」

アニーは少しドキリとした。

「私、絶対やるから。右腕もげてもやる。」

アニーは改めて鎌田と円代を少し睨み付けた様な顔で「ごめんね。ただいま。」と心で呟いた。

円代は少し微笑んで、厨房内へと戻っていった。

同日、東武野田線川間駅前には「橙祭、田中三保来校」の華々し

いポスターが貼られる事となり、生徒達の噂はハッキリとした現実となった。

k i s s m e b a b y 最後の練習日は、アニーのギブスが  
取れる二週間後に迫っていた。

## オータム・ハズ・カム

「なんじゃこりゃ。」

橙祭実行委員会議で渡された、野外ステージのタイムテーブルを見てアニーは愕然とした。

「橙ライブタイム野外ステージタイムテーブル予定」

1 2 : 3 0	1 2 : 5 0	「チアリーディング部」パフォーマン
1 2 : 5 0	1 3 : 1 0	「三年A組中野辰巳」日本舞踊
1 3 : 1 0	1 3 : 3 0	「合唱部」アニソン四重唱
1 3 : 3 0	1 4 : 0 0	「チスター・ミルドレン」バンド演奏
1 4 : 0 0	1 4 : 3 0	「ラルク・アン・ダルシム」バンド演奏
1 4 : 3 0	1 5 : 0 0	「kiss me baby」エアバン

ド演奏

1 5 : 0 0	1 5 : 2 0	「毛ミストリー」カラオケ
1 5 : 2 0	1 5 : 4 0	「春笑亭弁太郎」落語
1 5 : 4 0	1 6 : 0 0	「少々問題」漫才

「ダルシムの次って…オイオイ。」

ラルクのフロントマンがダルシムだったら、ザンギエフと戦うのはhydeになるのだろうか？しかもこのバンド、ブルーハーツのコピーバンドらしい。インドインド…ってか？…うーむ。若さって、とてもバカ。

選考基準もクソも無い、拍子抜けしてしまうにも程があるラインナップだが、四の五の言わず、k i s s m e b a b yはこの舞台で戦わなければならない。

合同練習最終日を一週間後に控えたk i s s m e b a b yの四人は放課後、学食に集まり緊急会議を行った。

「これってまさか田中三保の真裏じゃね？」

タイムテーブル表を見ながら里美がゾツとする盲点を付いた。

「あ…、田中三保トークライブ、十四時からだからモロだ…。」

「それじゃあ、全校生徒プラス一般入場者の約八十パーセントがこの時間は体育館ホールに集うってワケね。」

「鎌田、残りの二十パーの人達は何？」

「じゃんけんで負けた露店の店番が十パー。便所でセックス中の男女が二パー。田中三保を知らないジジババの保護者が三パー。そして残り五パーが、私みたいなオカマ・ゲイに違いないわ。」

「瞬間的オカマ人口が保護者上回るのかよ！恐ろしい三保効果ね…。」

「んじゃ、うち等は店番と、ジジババと、ニャンニャン中と、オカマ相手にライブするって事ね。」



「……………」。

全員この事実には笑う事が出来なかったが、円代が沈黙を破る。

「…そんなんでいいわけないでしょ！」

「んじゃーどうするよ？相手はティーンのおっぱいモデルだよ？」

「おっぱいモデルかブラモデルか知らねーけど、おっぱいだったとしても仕方ねーのかよ！モデルに『ウソ食ってよ』って言われたら『モデルが言うならいただきます。』ってなるのかよ！」

正常な大人が言うとは思えない、バカガキみたいな事を円代は真顔で言った。

「んじゃーすんのおっぱいちゃん…。演奏時間はずらせないよ？」

「要するに、だ。田中三保がその時間に出なければいい。」

「どーしたって出ちゃうでしょ。その時間トークライブなんだから。」

「田中三保を体育倉庫に監禁するとか…」

「おっぱいちゃん、こちら全員お縄だよ。んな事したら。」

「田中三保を今からメンバーに引き抜くとか…」

「円代ちゃん、そしたらドラム交代ね。」

「田中三保を差し置いてうちらがトークライブするとか…」

「円代ちゃん、前説にもならないよ。」

「田中三保を田中邦衛にすり換えるとか…」

「円代ちゃん、たぶんギャラのアタマ飛び出るよ。」

「田中三保を…三保を…」

「円代ちゃん？あれ？」

円代は悔しさの余り、テンパっていた。

「あーダメだダメだ！何も思い浮かばない！うちらプラモデル以下かよ…ちくしょう…」

「円代ちゃん、まだ八十パーセントの人が全員そっちに流れるとは決まってるじゃないよ！昨年のネプチューンみたいに入場規制が掛かれば、中に入れない人だつて出てくるよ！正々堂々戦うしかないよ！負け戦つて決め付けてちゃ…」

里美がヒートアップし、円代はレディース時代をふと思い出した。

「…里美、そういえば私、負けないケンカを選んだ事なんて今まで無かったわ。そうだよ。何かをするのは田中三保が居るからじゃないよね…。」

「なんとかしようよ。ビラ配りでも何でもする。お客さん見に来て欲しいし。」

「私のオカマ仲間にも声かけてみるわ。」

「学食パートのみんなや、昔のツレ達にも協力あおってみるよ。」

「私は文化祭実行委員のコネを使ってやるわ。」

田中三保という未知なる外敵（どちらかというどダルシムの方が未知だが…）は、k i s s m e b a b y初ステージにとって大きな台風の目に他ならない。四人は燃えていた。

「曲順はこれで最終固定ね。ここの演出は鎌田、ここは円代ちゃん、アニーはここ。んで…。」

下校のバスはもうとっくに出てしまっていたが、誰も居ない学食で四人は楽器も持たず、音楽も一切流れていない空間で、確かな音楽を作り出していた。

## イエスタデイ・ワンス・モア

アニーはグツと右腕に力を入れた。「ピシッ」と、軽い静電気の様な痛みが骨に響いた気がしたが、その痛みに慣れたいが為に何度も手を握る。

痛い動く。大丈夫だ。いける。これならやれる。

アニーはそう自分に言い聞かせながら、少し蒸れた右手をポリポリ掻いていた。

「痛み止め渡しておきますからね。ギブスが取れたからといって無茶はダメですよ。体育とかもつての他ですからね！アンタみたいなおてんばそうな子はすぐはしゃぐに決まってんだから！ははは。くれぐれもお大事にね。」

アニーはその先生に、「あと一週間ちよつとしたら、この治ったばかりの手で思いつきりありもしない楽器ブツ叩くつもりエアギターかますんですよ〜アハハ〜」で、何か？「…とはもちろん言えなかった。

とは言ってもやはり無理は出来ず、k i s s m e b a b y最後の合同練習は学校の屋上で行い、アニーは右腕をケアしながらの参加となった。

MDラジカセは雑に持ち運び過ぎて、取っ手が取れてしまっていた。

「……………はい。ここでジャーンとしまして、次のカウント入るまで…」「コ―…!」

「ごめん。もう一回あそこの打ち合わせさせて。止まるトコ徹底したいから。」

「あ、MD割れた。」

「んじゃ歌いながらやるか。せーの…」

「ちよつと待ったー!」

ちよつと待ったコールをしたのは、ねるとん世代ドンピシャの円代だった。

「なに円代ちゃん…、トイレでも行きたくなくなった?」

「里美、鎌田、アニー、アンタ達、今一瞬でも今までの事考えた?」

「へ?なにそれ?」

「今までの事よ。学食で出合つて、バンド名決めて、選考書類出して、新宿行つて、春日部で練習して、怪我でやきもきして、喧嘩して、そしてたった今こうして練習している事全てよ。その事を一瞬でも考えた?」

里美が即答する。

「円代ちゃん。正直言つて、今言われて『ああ、そんな事そう言  
えばあったな』ってくらいに軽く思い出したくらい。…だよな?」

「…うん。私もそう。」「アニーが答える。

「受験勉強さえ忘れるくらいよ。考えてるのはステージの事だけ。  
」鎌田も同調した。

「…よかった。安心した。みんなが思い出なんかに浸ってたらク  
ソだな、と思つててさ。」「

「円代ちゃんは新宿に行った事だけは思い出そうにも思い出せな  
いんでしょ?」

「それって酷い!私あの時、一生懸命踊つたのにい!あはは  
はは。」「

「円代ちゃん、」

「何?里美…」

「『りぼん』の主人公じゃないんだぜ。ふつ。」「

「あ。」「

「ぶ。」「

「ぶ。ぶ。」「

「ぶあはは。」

「あつははははははー!」

「よつく言つよ里美!!!さ、さつさと仕上げてKFCでも行こうか!!!!」

結局最後の最後まで、いつもの調子で終わった練習。

アニーは、ケアするつもりがつついっつい力が入ってしまい、練習が終わってから少し右腕が痛んでいた。

入学して半年、本当は各自様々な思いを抱えながら活動を続けていたが、不思議とその夢の中では非現実的に没頭出来ていた。人間関係、家庭事情、未来、過去、そして今。全ての葛藤と空を舞いながらkiss me babyの四人はその宇宙の切れ端を掴んでいた。

里美が帰ってテレビを付けたら、ウィークリーウエザーニュースが目飛び込んできた。

「ゲ。曇りのち雨…。んま、なんかかなんだろ。良純だからハズレんべ。」

などと呑気な事を考えていた。

その、良純の予報を忠実に守るかの様に、橙祭までの一週間はどんよりとした空が続く事となる。

校門にアーチの準備が掛かった橙祭前日、里美とアニーは校門前で一緒に下校バスを待っていた。

「あー。せつかくの野外ステージ、天気悪かったらやだなー。雨天決行とは書いてあったけど…。」

「だよね里美。田中三保も雨が降りそうだから来ねーとか、ケータリングのカレーが辛過ぎて帰るとかねーのかな。」

「あのねアニー。YOSHIIKIじゃねーんだから。田中は仕事に忠実だよきつと。」

「里美に田中の何がわかんのかな？」

「いや、何も。テキスト。だって一緒にジョリパスもKFCも行った事ねーし。」

「だよね。」

何が「だよね」なのかサッパリ意味不明だが、少なくともトップモデルは春日部のジョリパスや川間のKFCは眼中にないと思われる。

そんなことあるわけねー！あはははーと笑いながら、里美は一瞬



通り過ぎて校内に自転車で入っていった人影を見逃さなかった。

「……………あ？……………ゆ、勇太……………？」

バスが来ても放心状態の里美。

気のせいだと信じたいが確かに見たあのシルエット。

あー疲れる疲れる！やめやめ！明日は楽しむぞ！！！！見間違い  
さ、きつと…。

…と、いう事を約十数時間悶々と考えていたら、橙祭当日の朝に  
なっていた。

カーテンを開けたら、今にも号泣しそうな空が里美を出迎えた。

## イントロダクション

「うわ！なんだあれ！」

橙祭の目玉となっている田中三保トークライブの整理券を求め、早朝から一般客も交じり、校門前は何やらただ事ではない異様な空気がとなっている。

焼きソバ、クレープ、タコ焼き、チョコバナナ等、露店の仕込みに余念が無い生徒達。油と蜜が入り混じった様な甘ったるい香りが、まるで大麻の煙のごとく所々から立ち込めていた。

ピカチュウの着ぐるみで呼び込みにハシャぐ生徒もあり、祭りを予感させるには十分な朝であった。

里美は、ライブの出番まではクラスで出すフランクフルトの仕込みを手伝い、同じクラスの理沙子と食品搬入を手伝っていた。

「うわぁ…、アレ見てよ理沙子。三保目当てにキモイオタクとかばっか集まるのかと思ったら、整理券配布のテントに並んでる女の子ばっかじゃん…。さすがトップモデルだね。」

「里美の出番って14:30からでしょ？田中三保、チョイ見してから絶対みるからね！エアバンド！」

「えーまじで？チョー助かる！がんばるぜ。理沙子は田中三保、全部見ないの？」

「ワタシはクラスの店番あるしね。整理券並んでる暇もないしさ。男子は仕事ほったらかしてみんなで並んじやってるし。エアバンドの時間になったら絶対に店閉めて女子みんなで応援するからね！」

里美はこれこそが鎌田の言っていた、祭りで生じる人種の差かと身を持って痛感した。理沙子こそが、三保を見れずあぶれてしまふ全体の二十パーセントに括られる内の人だったのだ。

里美は理沙子を含めた二十パーセントの人達こそ楽しませたいと強く思った。

「理沙子、楽しみにしててね！…ん？」

遠いところからふと、里美を呼ぶ声が聞こえた。

「おーーーーい、さつとちゃーーーーん。」

目線の先にはピンクのアフロヅラを被ったアニーと円代がいた。円代はギターベルトを放り出し、胸元から黒ブラも覗かせた、パリ静子スタイル。いやーん、まいっちゃんぐ。

「うわ…円代ちゃん、今日は特にボヨヨンじゃないですか…。」

「里美！円代ちゃん、さつきからずっと『ビール飲みたい』しか言っていないんだけど！」

「祭りってのは幾つになっても血が騒ぐわね！でも高校の文化祭

は酒類売ってないし持ち込みも出来ないから少し残念！つたく！」

「まったくもう…程々にしてね！私、仕込みが落ち着いたらステ  
ージ向かうから！んじゃ！」

里美は食品搬入を終わらせ、鎌田を迎えに行くことにした。

「よし…っと！ごめん！理沙子！私ステージ行っ  
て来る！また戻り次第手伝うね！」

「おうっ！里美！ロックンロールしてこいよ！」

里美は親指を立てた。

校門に向かったところ、一台の黒塗りクラウンが止まり、クラク  
シオンを二回鳴らされた。

「お出ましの様ね…。カモン！シンディーっ！」

「…遅いわよ。子猫ちゃん…。」

車から颯爽と降りてきた鎌田は「ナインスパイク」と同じ衣装を  
身にまとい、完全に夜の蝶に変貌していた。シンディー、西部橙高  
校初上陸の瞬間である。

続いて福の神ことハッピーちゃん、メロンちゃんが曇りなのに日  
傘を差して降りてきた。

「んもおっっこねこちゃあ〜ん、おひさしぶり〜！またあえてほ

んつとぅにうれしいわ！今日のライブがよかったらつねつねしちやうからねっ！んもおっつ。」

福の神ことハッピーちゃんは、相変わらず男より男らしい声で激励してくれた。

「何かが起こる予感しかしないわ！」メロンちゃんが絶叫する。少し落ち着けよ。

シンディ、ハッピー、メロン、里美が歩くと、すれ違う皆が振り向き、一般客に混じった外国人までもが「オッウ、ジャパニーズ・ゲイシャレディー！エクセレンツ！ファンテリユージュオン！」と雄叫びを上げ、シンディ達と記念撮影をしていた。

「オッ、外人サァン、ジスイズ、ノット、コンピュータグラフィックス！オケイイ？」

里美がそう言うと、外国人はいつい「リアリィ？」と返した。オッウ、イツツアメリカンジョーク。

里美はピクサーから飛び出した三人を連れ、ステージへ向かうとポイン円代とアフロアニーに合流。リアル・モンスターズ・インクの様相を挺した。ステージのライブは既に始まっている。

それと同時に、体育館に人も集まり始めた。皆、自分とは一切関係の無い所で起こってしまった事件に胸を高鳴らせている。田中三保トークライブまであと一時間半。おそらく田中三保は裏口から誰にも気付かれない様に、学校入りを果たしているだろう。

その時、いきなり校門のあたりにけたたましいマフラー音が鳴り響いた。

バイク数台、蛍光色の改造車が学校の前をウロウロしている。

「あつ。来た来た。」

「えっ…？来たって、まさか円代ちゃんあれ…」

「そ。応援に来てくれた後輩達。だ〜いじょうぶよ。私が居れば絶対暴れたりしないから！」

アニーの笑顔は完全に引きつっていた。

作業服姿の男が円代に近付いて「気を付け」をした。

「マルセンペイチースイー！！サシユワエテシィツスユ！！」

「どうやらこの紫色パーマで歯が溶けている子の言葉を訳すと、「円代先輩、こんにちわ。久しぶりに会えて嬉しいです。」と言っているらしい。」

「おう。遅かったね、アンタ達。わかってるだろうけど、二二で変な騒ぎ少しでも起こしたら…わかるね？」

「マルセンペイツテワシイテユワ！ポイ！オメラワイサツシヤヨ  
！！！ジャツツレイサシユ！」

どうやらこの紫色パーマで歯が溶けていて、お母さんが持つようなセカンドバッグを下げている子の言葉を訳すと、「円代先輩、わかりました。オイ。おまえら挨拶しろよ。失礼します。」と言っているらしい。

「あいつ牛瓶瓶嚙んでアンパンやりすぎて、歯が前歯しかないだよ。ついたアダ名がバカボン。」

「円代ちゃん…どんな学生時代だったのか、強烈に知りたくないよ…アワワワ。」

数人のオカマと数人のヤンキーに囲まれ、里美とアニーの周りにはドーナツ化現象が進んでいた。

ステージ上では着々と演目が進んで行き、それを横目に体育館は、より一層のざわめきを増していく。

今にも雷ごと降って来そうな空は、午後に入入しても晴れることは無かった。里美は時々頭に冷たい雫を感じていたが、決して空を見ることはしなかった。

時刻は田中三保のトークライブまで三十分、k i s s m e b  
a b y のライブまで一時間となっていた。



20% VS 80%

田中三保トークライブまで十分前となり、ステージ前は人がまばらになり始めていた。

あちらこちらで田中三保目撃情報のデマが飛び交い、悲鳴にも似た歓声が所々で聞こえる。

「…なんか人事みたいだけど、次に出るバンドかわいそう…」本当に人事みたいにアニーが同情する。

次のバンドは「ラルク・アン・ダルシム」だ。ボーカル担当が野球部ばりの坊主だったので、「あー、そういう事ね」と妙に納得。だとしたらラルクは何なんだラルクは。

ダルシムが歌う一曲目が始まる前から、もう既にパラパラと雨が降り始めていた。里美達にしてみれば田中三保に加えて、これ以上無い最悪なパターンである。

後方のテント内で、学年主任の鷹瀬がPAの人と何か話している。鷹瀬は舞台スタッフの生徒に指示を出し、ブルーシートを舞台袖に用意させた。

「ねえ、これってもしかしてB・Zみたいに大雨の中ライブやるって事？」

「大…雨か…。良純のヤロー、余計な時ばかり当てやがる！」

雨足はどんどん強まり、福の神ハッピーちゃんは傘が小さすぎて（身体が大きいとも言つ）、顔以外ズブ濡れになっていた。

三曲目の「首吊り台から」が終わった瞬間、PAは両手でバツを作った。舞台スタッフがステージ上の機材をブルーシートで包み始める。ついでだ、とばかりにダルシムも一緒に包まれた。

「嘘でしょ？ねえ、マジで？は？どーなの？コレ？」

円代が半ばパニック状態になり、kiss me baby四人は青に包まれたステージを見つめ、呆然と雨を凌ぐしか無かった。…その瞬間である。

「ゴオオオオオオ」

「キヤアアアアアア」

「ドドドドドドドドドドドドドドドド」

体育館の方向から、物凄い地鳴りの様な歓声と拍手が響いた。田中三保が二十分押しで体育館に登場した事は容易に想像出来る。

学年主任の鷹瀬はPAに軽い御辞儀をしながら渋い顔をして、手でバツを見せた。それに頷いて応えるPA。

野外ステージは雨の為、非情にもkiss me babyの直前で中止となってしまうた。止む事を期待出来そうにもない雨足で

ある。ダルシム達は、見ていた友人達と何事も無かったかのように体育館へ走っていった。

「こんな事って起こり得るのかよ……………」

里美、アニー、円代、シンディ、ハッピー、メロン、円代の後輩達、理沙子含む里美クラスの女子数名、他ギャラリー数名が、ドーハの悲劇の様に言葉を失っていった。

我慢出来ずに円代が口を開き、鷹瀬に突っ掛かっていく。

「ちよつと！学年主任！！余りにもひどいじゃないのよ！私達の意志確認もシカトして一方的な中止するなんて！！フザケんな！」

「オウゴルア！ニヤアルステツポツスンジャーチョ！ポイ！」

この紫色のパーマが濡れて、新鮮な茄子みたいになっている子の言葉を訳すと、「お前。こらっ。舐めた真似しているとボコボコにするぞ。おい。」と言っているらしい。

「電気機器を扱ってるんだ！この天候じゃ無理も無いだろ！私だつて悪気があつて中止したのではない！君達は楽器が無いからいいが、前のバンド達やPAさんはどうなる？安全な判断を取ったに過ぎん…」

「じゃあ、先生、別のステージでやらせて下さい。お願いします…。」  
「里美が悲痛に訴えた。」

「学校内は何処も出店等でスペースが埋まっている。空いているのは外だけだ。」

「ちよつとアンタ、この状況見てマジで言ってるのぉ？」メロンが抗議する。

「現実問題を言ったまでだ！大体なんだ！？アンタ達は？うちの生徒の関係者ですか？当校の風紀にも関わりますので、これ以上騒ぎを起こしたら、橙祭どころか指導室行きになりますよ！？まったくもう……」

鷹瀬は我を忘れた自分を取り戻すように、息を落ち着かせてからまた口を開いた。

「私だってお前達に晴れ舞台を飾ってもらいたいに決まっている。だがこの状況では……」

体育館と、水溜りの出来ているステージを見て溜め息を吐く。

鷹瀬はPA横の待機テントに戻っていつてしまった。

「里美、どうしよう……」

「どうしよう、じゃないでしょアニー。腕がもげてもやるんですよ。」  
「円代はイラついていた。」

「やりたいよ。やりたいけど……これじゃあ……」

「みんな。落ち着いて考えるのよ。方法を見つけるのよ。」四人を促すシンディ。

「………………。ちょっとトイレいってくる。」

里美はスタスタと、学食内にあるトイレに向かっていった。その時である。

「超ダセー。」

その声にふつと振り返ると確かに勇太が居た。

「は？アンタなんでココに…？」

「まじでダセー。笑うくらいダセー。」

「わざわざ大雨の中、バカにしに来たの？」

「ふつーに見に来たんだよ。あ、お前らじゃなく、田中三保。」

「この時間ちようどトークライブ中よ。中入れなかったの？バカ。」

「バカはどつちだよ。」

「わかんない。こんな結果にする自分がいちばんバカ。でもそれを笑いに來たアンタだってどうしようもないバカ。」

「何が結果だよ。何も始まってねーだろ。早くトイレで泣いて来いよ。ホラ、早く。バカだから泣けばすぐ忘れるべ？」

「……………泣かない。」

「お前が泣こうが泣くまいがどーでもいーけどよ、お前の仲間達なんてもっと泣きたいぜ。お前みたいにバカじゃねーもん。」

「なんで私の仲間の事知ってるのよ。」

「中入れなかったんだよ。」

「バカね。」

「かもな。」

「いや、ごめん。ちがう。」

「ん？」

「……………私、行くわ。」

「は？ちよ、ちよっと……………」

里美は外のテント内で待機している、二十パーセントの括りに入ってしまった者達に向かい、猛ダツシュした。

水溜りを踏みつけながらテントに向かい、大声で鷹瀬を呼び出す。

「鷹瀬先生！！！！アニー！！！！橙祭実行責任者は誰？！誰なの？  
？！……」

「どうしたのよ里美！いきなり……………」

「いいから教えて！誰ですか？先生！教えて下さいっ！！！！」

「あ……、わかった。陸上部顧問の朝野先生だが……どうするんだ……？」

「鷹瀬先生も一緒に来て下さい！kiss me babyはもちろん、福の神さん、メロンさん、円代ちゃんの後輩達さん、そして、理沙子達も！！！！お願い！！力を貸して！！！！みんな全員で朝野先生に直談判しに行くのよ！！！！早く！！！！！！時間が無いつつ！！！！」

迫力負けしたのか、鷹瀬は静かに頷いた。皆も同調する。

「アニー、シンディ、円代ちゃん……」

「何？里美。」

「絶つつつつ対にライブするぞ。絶対に誰も泣かせない。」

「よく言った！」

「よし。行くわよ。」

「里美……っ。」

「みんな……！！！！お願いします……！！！！」

「んもおっつ、仕方ないわね！」「ポイポイ！ツキユルド……！ゴルア……！！」「里美！仕込み手伝ってくれた御礼よ！」「こ、こら、廊下は走るな！廊下は……」



体育館周辺はまだざわついていた。激しい雨音と混じり合い、祭りのビートを操作している。

大所帯となったk i s s m e b a b yは、八十パーセントの人種が作り上げる喧騒を身体で感じながら、橙祭実行責任者の朝野が居る職員室へと走って行った。

## ビット・イン・職員室

里美達は、野外ステージにブルーシートが掛けられてからの十分間程の記憶が曖昧であった。

全速力で廊下を駆け抜けながら、必死に夏のリフレインと戦っていたのである。

思い出というものは、結果が出る前では自分を軽く慰める言い訳にしかない。「そんな事もあったね」と皆で笑う事は出来ても、最後の罪は自身に残ってしまう事も里美は知っていた。

「そして勇太がそれを教えてくれたんだ。」

どうしようもない安い後悔は八十パーセントの人種となり、

今まで誤魔化してきた過ちは天候に形を変え、

適度な甘さで許してきた弱さは田中三保という仮の姿で現れた。

ハッキリと正体を見せた罪に向かい、里美達は自問自答を繰り返しながら職員室に飛び込んだ。

「はっ！はあはあ……！失礼します！」

「廊下を走るな。バカモン。」

陸上部顧問、体育教師の朝野はYシャツにネクタイ、その上に紫色のジャージを羽織りながら溜め息を一つ吐いた。

「はあ…っ！すみません！はあはあ…。あ…朝野先生…。お願いがあつてここに…はあはあ。」

「見ていた。」

「え？」

「野外ステージの事だ。職員室からはよく見える。」

「はあはあ…。そのステージの事で直接、話をしに来ました。」

「お前らの事だ。大方の予想はついている。」

「はあ…。」

「俺からの答えは『ノー』だ。」

「ちよっと…！あんたまで…ぐっ！」 円代の口を押さえて静しさ

せるアニー。

「ここだよ。」朝野は自分の頭を指差した。

「へ？どういふ事ですか？」

「『NO』じゃなくて『脳』だよ。それくらい、お前らの脳みそ使って考えろって言ってんだ。橙祭は誰かにやらされる祭りじゃねえんだ。」

「と、いふ事は……」

「ただし条件がある。怪我人を出すな。それに、変な羽目はずしやがったら即自宅謹慎処分にするからな。…ねえ、鷹瀬先生。」

「な……！ちょっと、朝野先生、本気ですか？」

「現場は鷹瀬先生が担当して下さい。私の許可は出しました。…だがしかし、野外ステージがダメになった今、お前達一体何処で演奏するつもりなんだ？」

里美はゆっくりと語り始めた。

「……学食でやらして下さい。テーブルにブルーシートを敷き詰めて、ステージにします。スピーカーシステムだけを移動させて、その音をバックにエア演奏予定。田中三保のトークライブを見終わ

った人達は、天候の影響、教室が露店や展示で埋まっている為、休憩場所の学食に必ず流れてきます。怪我をしないように、セキユリテイスタッフだって用意しました。」

里美は後ろに居た、円代の後輩達を指した。バカボン困惑。

「現場責任者は鷹瀬先生と私でやります。危険な行為があった場合はすぐにでもライブを中止します。以上です。ライブをさせて下さい。お願いします！本当にお願ひします！」

里美は鬼も一瞬たじろぐ程の気迫で朝野に迫っていった。

「先生、お願いします。」アニーは額が膝にぶつかりそうな程に頭を下げた。

「お願いします。」円代がバカボン達の頭をつかみ、一緒に頭を下げさせた。

「お願いします。」鎌田はシンディのウィッグを取り、ハッピー、メロンと共に頭を下げる。

「私達からも…お願いします。」理沙子と女子数名も頭を下げる。

「朝野先生…。私、こいつら見てますよ。変な事にならない様に…。だから…」鷹瀬は少し困った表情で弱気に言う。

朝野は頷いた。

「もういい、もういい。これじゃ俺が鬼教師みたいじゃねえか。やらせねえなんて一言も言っていないんだから。何度も言う様に、頭使えって言ってるんだ。ホラ、もうすぐ田中…ナントカさんが終わる時間だぞ。やるなら早くやれ。」

「よっしゃ…！」

「やった…！」

小さな声で皆はざわめいたが、里美は表情一つ変えなかった。

「ありがとうございます！朝野先生！急いで準備に取り掛かります。みんな！ありがとうございます！最後までお願い！」

おっっ！行こうぜ！と皆が職員室を出ようとした瞬間、朝野がいきなり怒鳴った。

「おい！お前達…！」

突然の大声に驚く皆に向かって、朝野は獣が出す様な低い声で言った。

「何度も言うが、羽目はすすんじゃねえぞ？…あともうひとつ、」

「あと…もうひとつは…なんですか？」

「廊下は走るな。」

「…はい！ありがとうございます！失礼しました！」

皆、職員室前の廊下を早足ですり抜け、コーナーをアウト・イン・アウトで曲がった瞬間、学食までのファイナルラップを全速力で駆け抜ける。

「里美。よくあんなとつさの意見出たね。…立派だよ。」

「いや…良純の週間予報見た時点で、もしものとき様で考えてたんだよね！それより、本番はこれからだよ！急ごう！円代ちゃん！」

「おっ…」

k i s s m e b a b y の生まれ故郷である学食に向かい、里美達は最後のヘアピンカーブを曲がっていった。

## パブリック・アドレス

つい先程まで里美と押し問答を展開していた勇太の姿は既に無かった。

里美達はラストチャンスとばかりに、急ピッチでステージ作りに取り掛かっている。学食中のテーブルを集め、角と角を揃え、足をガムテープで巻いていく。ブルーシートを敷けばもうそこは全日マツト…もとい、kiss me babyだけのステージが出来上がっていた。

体力担当の男手は、簡易スピーカーシステムの搬入をしている。もちろん、ハッピー、メロンはこちらサイド。バカボン達は渋々、カラーコーンをステージの前に並べていた。

「あーあー、テストス、ワンツー、マイクテスト、マイクテスト。」

エアヴォーカルの里美が立ち位置を確認し、ステージの距離感を確かめていく。

エアギターのアニーが在りもしないギターの調律に余念が無い。

エアベースのシンディは、汗で崩れたメイクを直している。

エアドラムの円代は椅子に座り、膝を叩きながら精神を集中させ



ている。

エアリハを終えたkiss me babyは、田中三保のトークライブがいつ終わったのかも気付かないまま、エア楽屋にて客の入り待ちをしていた。

「顔、スゲー小っちゃくなかった??やっぱモデルだよねぇ」

「っつーかそれは後ろでしか見れなかったからだべ?顔だけじゃなく、全部小っちゃかったよ。見えないくらい…」

「なんか一番前の方の一般客、ウザかったな。」

「だよな。荷物置いたまんまどっか行ってたし、退かそうとしたら思いっきり睨まれたし…」

「なんで花束贈呈が生徒会長なんだろうね。あれ、不公平だよな。」

「歌は要らなかったな。客がギャーギャー騒ぎ過ぎて全然聴こえなかったし。」

「Q&Aコーナーも段取り悪くてダダスベリしてたよな。」

「司会が悪いんだよ。」

「いや、客が悪い。」

「田中三保って喋るとイメージ崩れるね。」

「っていうーかさあ、」

「っつーかよ、」

「あまり面白くなかったなあ…。」

橙祭のハイライトとなるはずだった田中三保トークライブは、予想以上の一般客入場数により規制が大幅に掛けられ、殆どの西部橙生は事実上の締め出しとなっていた。

田中三保の芸能性や、クラスの友人同士によるごく僅かな話題性に飛び付き、ミーハー心に踊らされた若者達は、落胆や後悔を抱えながら、年に一度しか訪れない聖なる祭りの終幕を予感していた。

しかし、その釜の底の様なフィナーレに蜘蛛の糸が垂らされる事となる。

「ねーねー、なんか学食がスゴイ事になってるんだけど！ギャーギャーいつてるよ！…！」

若者達の伝達速度というものは半端なスピードではない。最後の光に吸い寄せられるモグラの様に、その小さな噂は瞬く間に大きな炎となった。

「なんか、テーブル使ってステージになつてて…演奏してるらしい!!!」

「え？それってバンドとか？ライブしてるの？誰が？」

「わかんない…でも、楽器は持ってないみたい…」

「ダンスでもやってんのかな？もしかしてカラオケ??？」

「生徒じゃない人がステージにいて…」

「え？まさかまた有名人??？」

「わかんない…行ってみる？」

「行こうよ！早く行かなきゃ終わっちゃうよ！」

橙祭のフィナーレは、まだ見ぬ田中三保を一目見ようと出待ちをする人々と、田中三保に見切りを付け、別の事件を求めに学食へ向かう人々とに二分化した。

八対二の比率が五対五となり、そして入れ替わり二対八となるまで、その時間は掛からなかった。

噂を嗅ぎ付けた生徒達が学食で目にしたものは、正に滑稽な奇術であつた。

誰がどう見ても楽器を弾いてないではないか。いや、弾いてないどころではない。持ってもいない。そこに在るべき奏でる武器が存在しないのだ。スピーカーから出ている音に合わせて当て振りをしてるだけ。声も出してないならカラオケ以下だ。動きが揃っている訳でもない。ダンスにしても質が低すぎる。音楽でもなく、スポーツでもなく、演劇でもない。いったい、こいつらは何をしているんだ…？

めちゃくちゃカッコいいじゃねえか…。

流れに身を預けた輩は思い思いに人の渦となり、生徒達の鬱憤はまるで密度を増したルーメン。すなわち、この瞬間こそがビッグバンの正体であつた。



## エアブレイ・イット・ラウド

学食のカーテンは締め切られ、普段から天井に付いているオレンジ色の暖灯は照明代わりとなり、フロアを静かに染めていた。

未だに何が起こるのか見当も付かず、流れるままに学食に行き着いた生徒は事件の始まりを待っているかの様であった。

「よし…。時間だ。」

鷹瀬が頃合を見計らい、開演の合図を出す。ステージ下の前方に並ぶバカボン達数名。後方に陣取った理沙子達。万一の事態に備えてのセキュリティも万全だ。

「SE…っ！」

メロンがエア楽屋から手を上げてPAに指示を出した。大音量でアル・クーパーの「Jolie」が流れ始めた。

まばらな拍手の中、円代とアニーがステージ上に昇り立つ。

円代はエアドラムセットの前に座り、上着のパーカーを脱いだ。「¥E\$」と描かれたTシャツで胸元はパツパツになっている。

アニーはふてぶてしく客席に背を向け、エアタバコを吸う仕草をしながら、エアギターのエアチューニングを念入りに行う。

そして鎌田ことシンディが現れ、妖艶なSEに合わせステージ上

を一周しながらエアベースを肩に掛け、エアアンプの前でエア出音を確かめる。パフォーマンズでエアジャックが抜けない様に、エアシールドをエアベースのエアエンドピンに巻き付けた。

まだ里美は出て来ない。

まさにバンドのライブ開始直前！…の様な描き方とは裏腹に、見てくれはただ何も持っていない派手なオカマと女子高生が二人立ち、真ん中にやたら胸が大きい女が椅子に座っているだけである。それ以外、ステージには何も無い。

SEが止んだ。

一瞬の沈黙の中、密かに円代はバックにセットしてあるMDラジカセの「PLAY」ボタンを押す。

TIME00:03になってからの4カウント、イントロのエアスネア八分ロールがジャストで入る。同時にアニーは下を向いたまま高い位置で人力フランジャーが掛かったエアギターを鳴らす。段々と二人の音が大きくなるにつれ、シンディも高い位置でのエアベースをチョーク気味に鳴らし始めた。

それらの音はMDラジカセ発、ラインPA経由、スピーカー行きで客席の鼓膜に注がれた。

「あつ！この曲知ってる！この前、OAKSで借りたやつだ！」

イントロを聴いた途端、フロアの男子が拳を上げる。kiss  
me babyの一曲目はレイジ・アゲインスト・ザ・マシンの  
「Testify」だった。ちなみにOAKSとは、野田市にある

T S U T A Y A みたいなモンである。

奈菜・モレロ、ティム・鎌フォード、円代・ウィルク達のエア楽器陣が、鉄壁サウンドをフロアにブチかます。

そしてヴォーカル、里美・デ・ラ・ロッチャがマイクを高々と掲げ、ぬらりとステージに姿を現した。

里美は口パクでザックばりのエアリリックをライムする。そのシンクロっぷりに度肝を抜かれた男子生徒の小躍りが次々と伝染し、*k i s s m e b a b y*のライブは開始わずか一分半で、学食のフロアがポゴ・ダンスホールと化し、混沌とした状態になっていた。

里美は歌詞カードを読んでも英語が覚え切れず、自己流のリスニングで適当にカタカナ歌詞を全暗記していた。「*T e s t i f y*」と叫ぶ箇所も里美は「エステ怖い」とリスニングし覚えていた。タモリ倶楽部なら手ぬぐいレベルである。

アニーはギターも触った事が無かったにも関わらず、ビデオでトム・モレロのトリッキーパーナプレーをエアコピーしていた。高い位置に構え、リフを弾く時はストロークしない。スイッチング、ストロキングスクラッチ、ワウペダルを組み合わせた大道芸ギターソロも、まるでアニーが本当に演奏しているかの様であった。練習中のビデオチェックでは「このキャップがぶつた赤飯みたいな人、染ノ助・染太郎くらい器用だな。」といった迷言（暴言ともとれる）を残している。



シンディはティムよろしく、縦に跳ねながらジャイアンの歌声にも劣らないボエボエ・ベースを手中に収める。どうやらティムの面がシンディの好みだった様で。そりゃよかったよかった。シンディがエアベースを弾いてると、レイジと言うより、ジエームス・ブラウンのバックバンドみたいにも見えてくる。うーん、ゲロッパ！

円代はブラッド・ウィルクのパワーヒットを参考に、大柄なりズムでフロント三人を煽る。円代が現役のバンドマンだった頃は、「出す音が騒音のドラマー」と叩かれもしていた（ドラムだけに）。

後半の展開部分、ドロップDでの八分刻みではエア楽器陣が目を合わせ、波を合わせ、自分達が出しているワケでもない音に身を重ねていった。最大の盛り上がりを見せるブレイクと同時に、全員がエア楽器を振り被り、次の小節の頭で斧を振り落とすかのごとく、爆音と共にドロップした。

フロアは既に前へ前へと人が詰め寄せて来ている。この時点で噂が噂を呼び、流れ着いた祭りの難民で学食は溢れ返っていた。入り口付近に居る鷹瀬、理沙子達が前方に詰める様呼びかけていく。

ラスト、フリー・テンポでのDシャープ・フォータイム。円代がエア・クラッシュシンバルを両手でミュートした。

「サンクス！ウィーアー、エアバンド！キスミーベイビー！！！！」

里美がそうシャウトした瞬間、歓声が沸き起こった。

次の曲に移る五秒間の間、フロア最後列に佇んでいた勇太の姿を里美はハッキリと確認した。

「…私には、今、やらなければならない事しか残ってないんだ」

表情に迷いは無い。私は確かにその真っ只中に居る。

里美の頭上で喧嘩をしていた天使と悪魔は、全ての音と共に空を飛んでいた。

## ドワー・イット・アワーセルヴス

「ネクスツ…」

里美はマイクをスタンドに差込むと同時に呟いた。

間髪入れず、円代が頭打ちのリズムを叩き、今度は低めのポジションでアニーがリードのメロを弾き始めた。

Hi-STANDARD「STAY GOLD」のイントロが流れた瞬間、ピカチュウの着ぐるみを着た女子生徒が前方へダイブした。学食のボルテージは一気に沸点に達し、モツシユの洪水が起る。

当時、全国の高校生をユニティーでひとつにさせたモンスターアレンセム。関東平野のへソに位置するここ西部橙高校も、決して例外ではなかった。

普通の奴も、バンドやってる奴も、サッカー部の奴も、帰宅部のヤンキーも、音楽の先生も、童貞ヤリチンサゲマンビッチ誰かれ構わず「Hi-STANDARDが好き」という会話が起これば、その中に世界が一つになるきっかけがあった。

Hi-STANDARDのアルバムを持っている奴は必ず「次、私にも貸して」とそのCDをクラスの三分の一くらいの奴らにドンドンたらい回しにされ、誰に貸してるか行方不明になりつつも最終的には盤面傷だらけ、音飛びしまくりのジャンク品として返ってきて

たりしていた…ってそれ、俺の実話だった。

まあ、大体の奴は「俺が借りた時はもう傷付いてたよ」なんてぶつこいてたっけ。そんな風に犠牲になったCDは結構あったりするんだよなコレが…と、ハイスタ聴く度に思い出す！わけない。

里美は思いっきりハンドマイクでパフォーマンスしていた。

「そもそもハイスタって三人でしょ…？しかもベースボーカルだし…؟؟？」と、後方で腕を組んで見ていた偏差値六十の進学クラスにいた評論メガネ野郎（簡潔にまとめて言うとかソリスナー）は、見てそう感じた様である。

こういう奴らによって、当時四人でスリーピースのバンドをコピーしたりするバンドは「卑怯者」と罵られていた。んじゃX JAPANをスリーピースでコピーしたら英雄かよ、ってな話である。突っ込むところはそりゃあるが、笑話で済ませりゃいいじゃんよーこのくらい。

相次ぐダイブに鷹瀬はヒヤヒヤしながらも、倒れた女子を引き起こす男子、セキュリティとしてテキパキとダイバーを処理していくバカボン達。激しさを増す学食内だったが、そこにはDo it yourself達。激しさを増す学食内だったが、そこにはDo it yourselfならぬDo it ourselvesが生まれていた。これこそが朝野の言った「誰かにやらされる祭り」ではない、「自分達で楽しむ祭り」を象徴していた。

十六小節のギターソロ後ブレイクタイムで、アニーとシンディはジャンプを決め、里美はステージ上からパンツ丸出しでダイブした。「おれたち、こんな事を望んでたんじゃねえ」という虐げられた高校生活の共通したフラストレーションが学食内で宇宙となり、もみ

くちやになる里美とオーディエンス。

最後の大サビでは皆で拳を突き上げシンガロングし、里美は曲の終わりと同時に汗まみれのままフロアに転げ落ちた。

「ありがとう！サンクス！みんなケガすんなよー！」里美はフロアでMCをする。拍手喝采のオーディエンス。皆、楽しそうに笑っている。

宇宙の恍惚を感じながら、里美は死にもの狂いでリフレインと戦っていた。

「まだまだよ！まだまだ楽しい事は終わらないよ！幸せが欲しい？エンジョイが欲しい？そんなアナタ達にピツタシの楽しい事用意してきました！ハッピーエンジェル！福の神！カモーーー！ンツ！！！」

三曲目はティ・ペンダーグラスの「DO ME」。

誰？その曲？と一瞬思うだろうが、学食内でそのメロディーを耳にし、その旋律に聞き覚えが無い者はひとりとして存在しなかった。

里美のいるフロアは丸いドーナツ状となり、里美が指したステージ上には付け髭をあしらったハッピーちゃんとメロンちゃんが「例のダンス」を踊りながら登場した。

そう。「DO ME」は「ヒゲダンス」のバックで流れているソウル・ミュージックの原曲である。

「レディースアンドジェントルメン！ウィーアー！キスミーベ

イバー！ア〜ンド！ハッピー！メローン！フロムナインスパーク  
！！！！」

里美は舞台袖に戻り、シンディからエアベースを受け取る。そしてシンディがヴォーカルにパートチェンジ。ガイコツマイクを包み込むような持ち方でシンディは歌い始めた。

アニーはソウル・ミュージックのカツティングもお手の物、とばかりに肩をすぼめながら小気味良くリードを弾く。

ハッピーちゃんが踊りながら剣を取り出し、メロンちゃんは剣に狙いを定めてグレイプフルーツを投げる。ティーンには馴染みが薄いパフォーマンスだったが、そのコミカルな風体もあり「もつとやれ」の声がチラホラあがっていた。

メロンちゃんがおもむろに舞台から降り、フロアに居る女子生徒にグレイプフルーツを手渡した。女子生徒はハッピーちゃんの剣めかけ、笑いながらアンダースローでグレイプフルーツを投げる。投げられた瞬間、ハッピーちゃんは口でキャッチした。この手のショーテクはナインスパイクで培ったものもあってか、まさに本領発揮。フロアから大きな拍手が起きると同時に、相乗効果でエアバンドの演奏熱もどんどん上がっていった。

落語で言う「枕」、クッションの役割を果たしていたこのパフォーマンスは、緊張と緩和のパターンを旨く突き、フロアの心を操作する事に成功していた。

それは、ステージでもフロアでもない、管理責任者である鷹瀬もこのパフォーマンスにはぐいぐいと引き込まれていた。

「そういえば、親に全員集合連れてってもらえてないの、クラスで俺だけだったなあ…」

鷹瀬が小三の時、土曜夜八時に一筋の光明を求めていた郷愁。その感情を許してくれるような *kiss me baby* のパフォーマンスに鷹瀬は感情移入していた。

皆と同じものを共有出来ないという迫害感。共通の情報を知るか知らないかによって生まれる免罪符。鷹瀬は当時の「学級」という強制的に仕切られた世界で味わった苦しみを、長い年月を経た現在の西部橙高校で浄化された様な気がしていた。

「あの時、こいつらが近くに来てくれたら俺の学生生活はどんな風になっていただろう」

フロアで巻き起こる笑顔の応酬に直面し、鷹瀬はリフレインに敗北を喫していた。

鷹瀬が我に返った時は、ハッピーちゃんが水の入ったバケツを思いつき振り回していた。

「DO ME」というショーの終わりに相応しく、フェードアウトで終わる楽曲。エアバンドの演奏する音も合わせて小さくなる。シンディが感謝の意を込め、フロアに投げキッスをした。

「サンクス！シンディ！ハッピー！メロン！三人にもう一度大きな拍手を！クラブハン！！！」

里美の煽りにフロアからは冗談交じりの歓声上がる。

「矢継ぎ早に演奏したけど…みんな、ありがとう。私達、kiss me babyっていいです。ほんとうに、ありがとう。最後にチャットやって終わります。」

円代が叩き出す十六分のエアスネアフィルから入る楽曲。

スピーカーから流れ出した曲は、チープ・トリックの「サレンドー」であった。

半年余りの夢でも見ていたかのような感覚に陥る。

外の大雨と対照的な橙祭の裏フィナーレが学食で幕を閉じようとしていた。



## オールシーズ・オールライト

「アンの言う事は正しいけど、俺は俺なりの考えがあるのさ」

「サレンダー」を選曲したのはシンディであった。

シンディはこのステージを降りた瞬間から、最低半年は鎌田利明の将来を見据えた戦争に身を預ける事となってしまう。その刹那も十二分に承知していたつもりだったが、開演前に里美が放った言葉に決心は揺らぐ。

「男は度胸。女は愛嬌。オカマは両方持つてるんでしょ？アタシ達女だけでは見えない景色、今日くらいは見たいんだよシンディ！よろしく！」

そういえば里美と出会ったのはこの演奏している学食だった。その時とはまるで別人の様な背中をしている。なぜ、こんなにも落ち着きの無い十六歳の女子供に信用を寄せる様になったのであるのか。

答えは明確だった。

お互いの全てを疑い、お互いの全てを否定しなかったのである。

懐疑的になろうとも、里美とシンディはお互いのスタンスを認め合う仲になっていた。

「アンの言う事は正しいけど、俺は俺なりの考えがあるのさ」

サレンダーのサビが皆で大合唱となって返って来る。もしかしたら、学食に集まって来ている生徒達は皆kiss me babyに自らを投影していたのかもしれない。

アニーも我を忘れ、時折エアギターから両手を離し、手拍子をしている。

俺も、私も、何かやってみよう。このままじゃいられない。言葉では陳腐になってしまう共通した蒼い衝動で学食の床はぬかるんでいた。

エンディングで曲が終わり切らない内に、里美は深々と頭を下げた。シンディが里美の肩を抱き、右手を掴んで掲げた。

ふと里美が顔を上げると、後方で満面の笑みを浮かべ、拍手をしている勇太の姿が見えた。

その時まで丈夫だったシャボン玉が地面に落ちて弾けてしまう感覚に襲われ、里美はその場にへたり込んでしまった。今まで支えてきたリフレインの大洪水が里美の全てを飲み込んでいく。

「今までずっと我慢してきたけど、もうダメだ。やっとわかったよ……。」

里美は勇太を驚かせてやりたいと一泡吹かせるつもりもあったのだが、喜びに満ち溢れほころぶその顔こそが、私の気付かない目標だったのだと確信した。

曲が終わり、気付いたら里美は肉声で叫んでいた。

「ありがとう！…みんな、ありがとう！！…ほんとうに…一時はどうなることかと思っただけ…無事にエアライブが出来て、鷹瀬先生をはじめ、案内してくれた理沙子達、セキユリテイしてくれたバカボンさん達、ハッピーちゃん、メロンちゃん、kiss me babyのメンバー、そして何より集まってきてくれたみんな、本当にどうもありがとう…うっ…うっ…」

里美はグズグズに泣き崩れていた。

後方で理沙子はBPM＝60のテンポで手拍子を煽った。その御離子は瞬く間に津波となり、学食全体からのアンコールをkiss me babyは全身で感じ取った。

「ホラね。事前準備で曲用意しといて良かったろ？」円代がそれ見た事か、といった表情でアニーと意思疎通を交わす。アニーはアンコール準備でエアチューニングを再度繰り返した。

泣きはらした顔で懸命に涙をこらえる里美は、凜とした姿勢でマイクを持った。

「うーんと…私はココに入学してくる前、中学の卒業式で同い年のクソガキ男にこう言われた挙句フラれました…。『大海に出て世界を知れ』と…。めちゃくちゃ悔しかったし、アタシは必ずそいつを見返して、目ン玉引っこ抜けるくらい驚かしてやりたいと思いました…。」

いきなり言い放った里美のMCに、オーディエンスは面食らった表情で聞き入った。

「…でも大海の入り口は想像以上に広く、逆に驚かされるばかりでした。そしてこの学食という大海の入り口でこうやってエアライブやれて、みんなの反応や偶然来てたソイツの笑顔を見て、なんかこう…うまく言えないけど…これこそが世界っていうのかな…。いけ好かない奴が別れ際に吐いた世界っつーものを…私はこれからもつと知りたいと素直に思いました！」

一斉に拍手が巻き起こった。「誰ー？元カレ何処に居るのー？」という野次を笑って無視し、里美は畳み掛ける。

「今ならソイツに胸張って言えるよ。『お前こそ大海に出た方がいいんじゃない？』って。…なんてね。感謝してるよ。ありがとう。本当にソイツ含め、今ココに居るみんなまとめて愛してるよ！アンコールどうもありがとう！！最後の最後！もう一曲やります！みんな！家帰るまでが橙祭だぜ！！ウィーアーキスミーベイビー！！！！ありがとうっつうっつ！！！！！！」

沸き起こる大歓声。理沙子は里美のMCに感化され、顔を抑え涙を流していた。

カモン円代！と里美は曲の入りを煽った。

流れてきたイントロは、里美が数日前に皆を驚かせた曲、斉藤和義の「歩いて帰ろう」であった。

数ヶ月前まで、復讐の念を持ち続けながら校門をくぐっていた里美は、思いもかけない形でその復讐を達成する事となる。



## クリーニング・アウトロダクション

夕方五時半。

一時間前まで熱狂の渦と化していた学食が、まるでシンドバッドの幻だったかのようにkiss me babyその他スタッフ数名は、学食の床をゾーキンで拭いていた。

「あー、たまんねえ。悪い意味で。汗と結露で床グチャグチャじやんよーもうー。こついうのはローディの仕事じゃねえの？おーい！バカボン！」

「チ、チス！ポイ！ンペエラ、チシイチプキュア！ボオロケ！」

セキュリティ業をこなし、「湘南爆走族」に出てくるハラサーを細くしたら似ているこの子の言葉を訳すと、「了解です。おい、お前等しつかり拭けよ。もつと！」と、言っているらしい。

「ねえ、里美はどこ言ったの？」アニーがバケツの汚れた水を交換しながら言った。

「シート！んもうっつ、このコムスメちゃんつたらデリカシーって言葉知らないのお？も・ち・ろ・ん…運命のさ・い・か・い！んやだあもあっつ！恥骨がむずがゆいいいいん〜！」

結露で脳が湿ってきたハッピー海坊主a・k・a福の神は、働かせなくていいオカマの勘（鎌田曰くカマ勘）を存分に発揮していた。

「はい…、里美ならさつき、私にモップ渡してトイレ行ってくる

って出て行ったつきり…」と、理沙子が何故か掃除を手伝っていた。

「あの子はいつつも肝心な時にトイレに行くのよね。まったく。メイクを落とした鎌田が微笑んだ。」

「どうでもいいが、チャンと後片付けするんだぞ。家に帰るまでが橙祭だ。」鷹瀬はブルーシートをたたんでいる。

里美は、自分でも良くわからない理由で勇太を呼び止め、体育館横の階段に座って話をしていた。

「…さっきまで、ここに居たんだよね。田中三保…」

「結局見れなかったけどな。ほんとに来てたのかもウチからしてみれば信じがたいぜ。」

「なんか…、いろいろ…ごめん。ほんと。」

「何にだよ。今まで含めた全部？」

「違うわよ。ステージで余計な事べらべら喋っちゃって…。勇太ああいうの嫌いじゃん。」

「うん…、俺は嫌いだけど、盛り上がったからいいんじゃない？」

「勇太、笑ってたよね？」

「は？何に？」

「ライブ中、笑って拍手してくれたじゃん。」

「あ…笑ってねえ…し。笑ってない！あまりに滑稽で含み笑いはしたかも。」

「嘘だ。ステージでしっかり見たよ私。笑った。勇太笑ってくれた！私は見たもん！」

「……………あ、そう。」

「……………絶対見たもん。」

「ごめん。嘘ついた。俺、嬉しくて笑ったわ。」

「ほら……………って、ごめん、一つ聞きたい事がある！」

「なんだよ急に。お前…学食の掃除手伝わなくていいのかよ！」

「いいから聞いてよ。今日、なんで見に来たの？最近なんで学校出入りしてたの？ねえ、なんで関係無い学校来てたのっ？ねえ！」

「お前、少し落ち着けよ…。一つどころか質問ガツツき過ぎだろ…。うーん…。」

「答えて。新しい彼女、この学校に出来たの？」



「う…ん…。違う。本当に違う。」

「んじゃ何？もったいぶる様な事なの？」

「…だよな。別に言えない事じゃないし、言つわ。実はココに、俺の親が働いてるんだわ。」

「えっ？まじで？そんな理由？」

「ああ。まじ。母親が働いてるんだ。自転車で迎えに来たりしてたんだ。」

「どの教科の先生？」

「いや…、教師じゃないんだけど…う…ん…学食で…働いてて…。」

「え！…！まじで！？円代ちゃんと一緒に働いてるの？凄い偶然じゃん！…！どこ？勇太のおかあさん！？」

「…これからよければ紹介するよ。着いて来いよ…。」

勇太はおもむろに立ち上がり、手招きをした。

里美は昔を思い出しながら、勇太の背を見つめながら廊下を付いて歩いた。

こうして勇太と一緒に歩くのはいつぶりだろう。つい最近の様な

気もするし、遙か昔の様な気もする。なんで二人はこうなってしまったんだろう。願わくばもう一度ふたりで…いやんばかんそれはだめだめんごむたいこうむりなさいませくと、里美恒例の一人脳内バカ殿コントを妄想していたら、里美抜きの皆が掃除している学食に行き着いた。

「あ。里美帰ってきた…。お土産付きで。」アニーがゾーキンを絞った。

勇太は里美を連れ、学食内をずんずんと歩く。照れ隠しか、里美は思わず円代を呼んだ。

「あつ…、円代ちゃん！中学ん時の友達のおかーさんが、円代ちゃんと同じ学食のパートで働いてるって言うからさ！紹介してくれるってさ！もうビックリしちゃって！！！！んで？勇太？学食…にはおかーさん居るの？私達スタッフ以外居くない…？」

円代がスタスタと近付いてきた。

「円代ちゃん？一緒に働いてるパートの人でさ…コイツのおかーち…」

里美の質問を思いっきりシャットダウンして勇太は口を開いた。

「紹介するよ。うちのかーちゃん。」

「へ……………?」

「はじめまして。里美さん。佐藤勇太の母、佐藤円代です。よろしく!うふ。」

学食で掃除をしていた全員の手が止まり、南極の様な凍て付く沈黙に包まれた。

里美は膝の感覚を失い、その場に倒れ込んでしまった。

自分のメンバーと元カレが親子関係だったという現実は、ライブの余韻をいとも簡単に吹っ飛ばしてしまった。

「やっぱり言うの、やめときゃよかったかな…」

勇太は、シヨックで椅子に横たわっている里美の代わりに、学食の床をモップで磨く事になってしまった。

テル・ミー・ホワイ・デイド・ユー・セイ

「里美、お疲れ様。俺…言いにくいけど…あの時、ゴメン。」

「あの時って？」

「卒業式の時…。俺も考え直してみたんだ。俺が小っさいせいで面倒な事にしちゃまって…もう一度、今なら、里美と旨い事やれるかもしれないって。今日のライブ見て思ったよ…。」

「やだ…嘘。勇太、そんな事言われたら私…私だって卒業式からずっと…あ、ダメだって…あ、むふうっっ」

勇太は里美の両肩を抱き、息を止め軽く唇を重ね合わせた。

「…ぷはあ。…んもう…勇太のエッチ。」

「あ…、ゴメン。ガツついちゃって…ホントにごめん…。」

「……………ううん。気にしてない。ったくもう。こっつなるんだっから卒業式にあんなこと言うなよ…。」

里美は額を勇太の胸元に預け、しな垂れた。

「里美、ごめん…。」

「勇太、さつきから謝ってばつかじゃん。もういいの。昔の事なんてもういい。なんか私やつぱり、勇太とこうなるのを望んでみたい。…嬉しい。」

「ほんと!?!」

「うん…。ヤダ、恥ずかしいって、あんま顔見ないで。勇太…。」

「んじやさ、今すぐ俺と結婚して、かーちゃんと一緒に暮らしてくれる?」

「は?へ?か、かーちゃん???」

「里美、アタシ三十代でオーバーちゃんなんて嫌だから子作りは勘弁してよね。」

「んああ!?!!円代ちゃん!?!!何でこんなところに!?!!」

「今日からお義母さんって呼んでいいよ〜ん さ・と・う・さ・と・み・さん」

「うああああああ!元ヤン小姑にファミリーハラスメントされるー!?!?!たすけてー!?!?!」ど〜なってるの?』で菊ちゃんにハガキ読まれるのだけは嫌ああああ!?!?!……」

…ふ…ふがつ」

里美が暴れながら目を覚ましたのは国道十六号沿いのサイゼリヤであつた。

「あー！みんなー！！！やっと里美が目え覚ましたー！！！」アニーが大声を上げる。

「んあー…あにい…アニー？！なんであなたまでこんなところに？」

「何を寝惚けてんのよ里美！打ち上げでみんな居るよホラ！里美、メロンさんのハイエースで爆睡してたじゃん！」

k i s s m e b a b yのメンバーはもちろん、ハッピーちゃん、メロンちゃん、理沙子をはじめとした里美のクラスメイト達が居た。

「え……？状況が把握しきれない……ここどこ？アイツは……？あ！元ヤン小姑っ！！！」

「はア？何よいきなり！まさか某元カレとチューした夢でも見たー？頼むからアタシの息子弄ばないでくれる？アンタの姑なんてゴメンだね！ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」円代がビールを片手に下品な笑い声を立てた。

うわぁ…どうやら、勇太が円代の息子だったという事までが現実だったようだぜ…なんてこつたいトホホ。それがいちばん夢であつてほしかったのに…という里美の心中だけは察するに余りある。

これまで夢を見ていたという事より、その欲求不満痴女の様な内容の夢で、里美は酷くダウナーになっていた。せつかく良かったライプの雰囲気もアイツのせいではぶち壊しじゃねえか…と、怒りをあらわにし、ドリンクバーの麦茶をドンドンおかわりしていく。

「あら、子猫ちゃん！あの時と同じ麦茶ね〜！アンタ日本一麦茶が似合うわあ〜！なんてね。お疲れ様！かつこよかったわよ！」

「…あ、福の神さん…ありがとう。今日色々お手伝ってもらったやつて…福の神さんも、ヒゲダンスのパフォーマンス最高でしたって…！！！」

「メロンも褒めてたわよ！アナタにオチンチンついてたらナインスパイクにスカウトしたいくらいだわって！ん〜いやあだあ〜んもうあ〜っ！今からでも遅くないわ！誰かのもらって付けてみる？」

「あは…あはは……申し訳ないっすけど、物々交換は全力でお断りします…。でも、福の神さん…。私、女に生まれてきた事を時々イヤになっちゃう時があつて。」

「あら。そんな事思っちゃうなんて勿体無いわね。私なんて女にもなれないし若さだって無いのよ？」

「私は色々と言葉では突っぱねた事言っちゃうけど、全部ハリボテなんです。結局勢いに流されやすいし、優しさにだって弱いもの。」

「里美ちゃん、だったね。私の娘も君と同じくらいの年齢で、同じような事を悩んでいるんだ…」



周囲はガヤガヤとした笑い声や話で包まれていたが、里美にはハッキリと聞こえる音量で、ハッピーちゃんこと幸男は急に声色を男にシフトチェンジして語りはじめた。

「人間というのは、世の中の役に立つ事ばかりを悩める様には出ていないんだよ。恋愛だ、夢だ、友達だ、志だ、学校の授業に組み込まれていない事ばかりこそが若さの砦なんだ。つまりない大人が覚えるのは無い物ねだりの回顧主義ばかりだ。いつだって世の中の役に立たない事をしなければ、いつの日か君は何かを達成出来なかった理由を自分以外の何かに擦り付けるようになる。」

「あ…。」

「私の今の姿は、世の中からしてみれば居ても居なくても変わらない、つまはじきの種族だろう。しかし自分の役に立つ事を続けていれば、不思議な事に今日みたいな再会や、観客の笑顔にふと出会えるものだよ。結果オーライだ。だから君も、今のうち意味の無い悩み事でたくさん時間を費やすんだな。結果は今日のライブでひとつ知っただろ？」

「福の神さん…。お父さんの顔になってますね。娘さん、かわいいですか？」

「ああ。生意気だが、時々家内とナインスパイクに来てくれるんだ。理解のある娘で感謝しているよ。」

「そのうち彼氏とか連れてきますよ。きっと。」

「ああ。彼女の父親がオカマじゃ彼氏もバツが悪過ぎるな。あは

は。」

「あ…円代ちゃんがまた酔っ払ってメロンさんにヘッドロックかけてる…いくらなんでも円代ちゃん、役立たな過ぎっ…!」

「どっつするんだい？あの円代さんとやらの息子さんとは？」

「へへ。色々フラフラしながらでも、自分の中ではもう答え決まってるんすよ。福の神さん。私は、いつつも一人じゃ決められないのよ。」

「そうか。君が出した答えならきつと、間違いは無さそうだな。」

「今、ササつと抜け出して電話してきます。あと、それから福の神さん…」

「なんだい？」

「すっかり幸男さんから戻るタイミング失ってますよ…？私が帰ってくる頃には、文字通り、ハッピーでちゃんて迎えてね！」

「あはっ…もちろんよ！シート！今の内に行って来なさい！コムスメちゃん…!」

里美はトイレに行くふりをしてサイゼリヤの裏廊下に移動し、勇太の携帯に電話した。

「あ…もしもし。私。」

「もしもし…あ…。お疲れ。」

「帰っちゃった？掃除してくれてさんきゅ。」

「俺がそこ居てもおかしいだろ。かーちゃんいるし、気まずいから。」

「そーだよな。…今日はかーちゃん見に来てたってわけだ？」

「何が言いてーんだよ。」

「いや、どんな理由でも見てくれただけでいいや。嬉しかったよ。ありがとう。」

「いや…あらたまって言われてもどうもしか…ま、いいや。どういたしまして。」

「いきなりだけど、勇太に一応言っておきたい事があるの。真剣に聞いて。」

「おう。ほんとにお前はいつもいきなりだな…。んで、なに？」

里美は、心臓に右手をあて深呼吸をする。今度こそ現実。夢ではない。

「私…、まだ勇太の事が好き。大好き。」

「……………あ、ああ。」

「でもね、」

「……………ん？」

「私、どんな事があっても絶対に、勇太とやり直して付き合ったりはしないから。…グスッ。」

「……………。」

「勇太に振られた原因も理由もどうだっていい。私は今でも好き。その理由もどうだっていい。でも、このまま勇太にとられてばかりじゃダメだと思ったんだ。ごめん。こんな言い方して。ごめん…グスッ。」

「いや…俺の方だって…」

「正直くやしいけど、絶対にヨリなんて戻さないから！アンタよりすげえ好きな事や大事な事、山ほど見つけなきゃいけない旅で私は忙しいの！だから…ひいっく、だからあ……………」

「里美…ごめ……………」

「本当にこんな奴に…やざじくしで…くれで…うっ…あでいがど  
う……………グスッ……………うっ……………」

「……………里美……………」

最後に、里美は勇太の言葉を遮る様にハッキリとした言葉で言い放った。

「…勇太も広い大海に船出して、世界の大きさを知るべきって事だよ。」

「……………さとみ……………」

かつて勇太が里美との別れ際に言った言葉を、里美はそのまま勇太に言つてのけた。

「…グスツ。…あーあ。やっと言えた。なんかすつきりした！あ、あまり遅くならない内に円代ちゃんタクシーブツこんで帰すから。ほいじゃーね。チャオー。うんこー。」

里美は一方的に電話を切った。

泣いた事がばれない様に、目を手で仰ぎ、「疲れちゃうし眠いしでアクビ止まらないわ、あー大変」的な空気をムンムンに作る作戦で席に戻るうとした。

ところが裏廊下を戻り、エントランスの席に向かうと、廊下の角で全員が集まり、聞き耳を立てていた。

「は…？あんたら全員でなにやってんの…？」

「あーっ！いやいや！注文したシナモンフォッカチオがいつまでたってもこないから、皆で厨房にクレーム言いに来たのよ！」

「は？なにそれ？なんで皆でクレームすんのよ…？そもそも厨房逆方向だし…。さてはみんな…盗み聞きしてたの…？まじうんこなんだけど…。あ、ごめん。言い過ぎた。訂正するわ。うんこ以下だった。ちーん。」

「最初はアニーが行こうって言い出したんだからね！」鎌田が責任をアニーに押し付けた。

「あー！鎌田ずつりー！ゾロゾロ付いて来たのはみんな一緒じゃん！理沙子ちゃんなんてノリノリだったよ！」アニーも思わず理沙子にまで火の粉を飛ばした。

「あ…、ごめん里美…。クラスであんだけ男キライキライ言ってるから珍しくてさ…。」ごもつともである。理沙子に座布団二枚。

「もう！いい加減にしてよ！みんなどうせ最後まで聞いてたんでしょ？だつたら包み隠さず結果はその通り！…ねえ、円代ちゃん。」

「…何よ。里美。」

「円代ちゃんの息子、幸せに出来なかった。本当にごめんなさい。」

「なにそれ。謝られる意味がわかんないよ…いい？よく聞いて。あんたと親戚になるつもりなんかハゲの毛ほども持ち合わせちゃいないよ！あまり勇太をナメないでくれる？アタシの子供だぜ？半端な育て方なんてしてねーから余計な心配すんなよ。ダメ彼女。サゲマン。バカガキおんな。うん子。」

「ちょっと、円代ちゃん言い過ぎっ…！」アニーが止めに入る。酔っているのか定かではないが、円代は里美に絡んでいった。

「でもね、その代わり出来の悪いカワイイ息子を傷付けてくれた罪は重いわ。約束して欲しい事がある。」

「なに…？円代ちゃん…？」

「そんなクソ生意気女のおかげで最高に楽しかったんだよ…私はアンタが好きだから、親戚には向いてない。私…いや、私達とずっと友達よ。マブ。里美大好きだよ。さ、主演の交えて飲み直そうか…！」

「円代ちゃん…。グスツ…」

「アンタ、本当に泣き過ぎ。どこまでもひたすら『りぼん』だな。その部分はいつまでたつてもヤダ。ったく女々しい！…大丈夫。里美。今夜くらい私達一緒に居るから…。ね。さ、みんな戻る！」

宴会部長田代は手を叩きながら皆を席に戻し、打ち上げのリセツトを始めた。

「よっしゃー！！！ゼリヤの店員！デキャンタ、ビール、麦茶、なんでもジャンジャン持ってこいやオラー！！！！…あ、すいませーん。さつき頼んだシナモンフォッカチオ、フォッカチオ抜きでお願いしまーす。」

「…田代ちゃん、それただのシナモンじゃん。…ひっく。」

里美は涙を我慢し過ぎて、剥きたての甘栗くらいしわくちな顔をしていた。

福の神、幸男は里美との約束通りハッピーちゃんとして切り替え、遠くで里美にウィンクをしている。

悩むべき世の中の役に立つ事柄など、一体誰が決めて、そして理解し、実行できるものなのだろう。里美どころかまだ誰一人として判別が出来ないままであったが、ただひとつ、涙と仲間によってめちやくちやになって今夜の喧騒こそが、長い旅の理由であったのかもしれない。



里美は、これからの長い人生、この旅の記憶が甦る麦茶の味が、  
いつまでもほろ苦く残る事となった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4668m/>

---

キス・ミー・ベイバー

2010年10月19日19時22分発行